

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

- スベンサー・W・キンボール
- N・エルドン・タナー
- マリオン・G・ロムニー
- ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

- エズラ・タフト・ベンソン
- マーク・E・ピーターセン
- リグランド・リチャーズ
- ハワード・W・ハンター
- トーマス・S・モンソン
- ボイド・K・バックー
- マービン・J・アシュトン
- ブルース・R・マッコンキー
- L・トム・ベリー
- デビッド・B・ヘイト
- ジェームズ・E・ファウスト
- ニール・A・マックスウェル

顧問

- M・ラッセル・バラード
- ローレン・C・ダン
- レックス・D・ビネガー
- チャールズ・A・ディディエ
- ジョージ・P・リー
- F・エンツィオ・ブッシェ

編集長

- M・ラッセル・バラード

国際機関誌

- 編集主幹：  
ラリー・A・ヒラー
- 編集副主幹：  
デビッド・ミッチェル
- 子供の頁編集：  
ボニー・ソーンダース
- デザイナー：  
ロジャー・ギリング
- 制作：  
ノーマン・プライス

も く じ

敬虔ということ……………マリオン・G・ロムニー……………1

質疑応答……………リランド・H・ジェントリー……………7

炎の中で……………スティーブ・チェリー……………12

口を開きて……………ジョー・J・クリステンセン……………14

一通の手紙……………メアリー・ヨハンセン……………20

質問ゲーム……………ノーラ・カールソン……………21

祈りの証……………スーザン・タナー・ホームズ……………23

女性の神権に対する正しい眼……………パトリシア・T・ホランド……………24

友達のために……………アン・エドワーズ・キャノン……………31

キャサリンの信仰……………クリフォード・J・ストラットン……………34  
マージャ・ロムニー・ストラットン

彼の人々を見だして……………ロイデン・G・デリック……………39

キンボール大管長，  
若人の人生設計を語る……………スベンサー・W・キンボール……………42

天のお父さまの時間……………チャールズ・A・ディディエ……………51

おもちゃばこ……………メアリー・ゲーマン……………54

ソマリアの草原で……………メアリー・ゲーマン……………55

チャーチニュース／ローカルページ……………60

表紙の説明：「ノーヴーのジョセフ・スミス」と題するこの絵は、教会が急速に成長していた時期の、予言者の姿を描いたものである。イリノイ州に建設されたノーヴーは、1844年

6月にジョセフが近くのカーセージで殉教をする前に、すでに2万人の人口を擁し、発展を続けていた。改宗者であるセオドア・ゴカによるこの絵は、ソルトレーク・シティーの教会本部ビルに飾られている。

聖徒の道 6月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定 価 年間予約2,200円  
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0460 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 まつじつ 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター

# 敬虔けい けんということ

第二副管長  
マリオン・G・ロムニー



**手**元の辞書によれば、敬虔とは、「心から敬い、愛し、仕えること」と説明されています。私たちが神に対する敬虔さについて話す場合、この愛と献身を伴う敬虔、つまり敬う気持ちは、礼拝の本質を示しています。そしてこの敬虔さは、神への愛が強くなればなるほど深まっていくものなのです。

教会の様々な集会における敬虔さは、神をどれだけ愛しているかということに直接比例します。一部の集会の秩序について、好ましくない意見があることを確かに聞いています。当然のことですが、私たちは皆、自分が向上しなければならぬことを肝に銘ずる必要があります。

世界中のあらゆる民の中で、私たち末日聖徒は、最も神を愛する民でなくてはなり

ません。ほかのだれよりも神を愛する義務があります。なぜなら、私たちは神についてそれだけ多くのことを知っているからです。

主に対して深い敬虔の念をいただいている人は、主を愛し、信じます。また主に祈り、頼り、主によって導かれています。主を心から敬い、仕えている人には皆、いつでも主から靈感が与えられてきましたし、現在でも与えられています。

私たちは経験から、神が祈りに答えて下さることを知っています。神はあなたの祈りに答えられ、また私の祈りにも答えて下さいました。私たちが問題を持って神のみ前に行けば、神は理解と思いやりの気持ちをもって聞いて下さるのです。私たちは神のみもとから来ました。そして私たちの願いと望みは、神のみもとに帰って神に似

た者となることです。

これらの重大な真理を知ることは、何と素晴らしいことでしょうか。この真理を知っていること自体が、神への愛を深めるのです。そして、神への愛が深まるにつれて、敬虔な思いも高まっていくのです。

もし私たちが神を愛するならば、私たちは神に仕え、神の戒めを守るべきです。救い主が一番大切だと言われた第一の戒めは、「心をつくし……て、主なるあなたの神を愛せよ」です。「……第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。』」そしてこのように付け加えられました。「これらの二つのいましめに、律法全体と預言者たちが、かかっている。」(マタイ22: 37, 39-40)

ここで主が言われた律法とは、モーセの律法のことです。また「預言者」という言葉は、ユダヤ人が敬うべきであると公言していた旧約時代の預言者たちの記録を指しています。したがって主は、私たちが心をつくして主を愛し、自分を愛するように隣り人を愛するならば、当然、神への敬虔ということも含めて、すべての戒めを守っているはずであると、言っておられるのです。

私たちは、すべての子供が主の家に対して敬虔な気持ちを抱くように願っていますが、ただ口で静かにしなさいと言うだけでは効果がありません。教会で静かにすることは確かに敬虔の表われではありますが、静かにしていること自体が敬虔であるという訳ではないのです。けれども、自分の集

っている場所が、心を尽くして愛する主の宮であることがわかれば、敬虔な気持ちを抱くことは難しくありません。

モーセはどのようにして敬虔ということを教えられたのでしょうか。モーセは妻の父の羊の番をしていた時、しばが燃えているのになくならないのを見て、調べてみようと思いましたが、道がわからず、主はしばの中からモーセを呼んで、「モーセよ、モーセよ」と言われました。モーセは「ここにいます」と答えました。

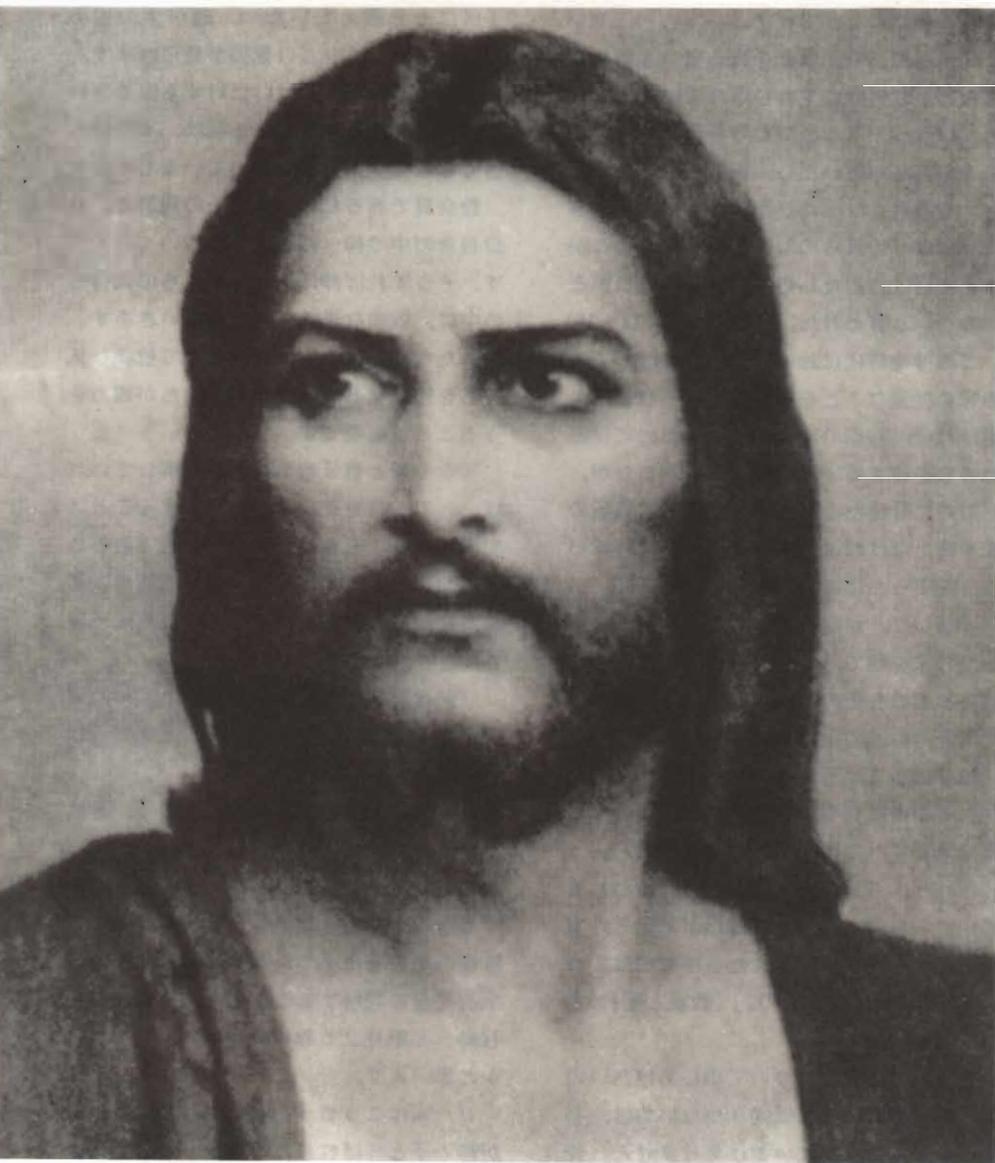
すると主は言われました。「ここに近づいてはいけません。足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである。」(出エジプト3: 1-5 参照)

そこに主の宮がなかったことは確かです。あったのはやぶだけです。しかし、主がおられたためにそこは聖なる場所であり、敬虔にしなければならなかったのです。

さて、主の家は主のみたまが宿る所です。したがって、もし主を愛しているならば、私たちは主の家で無礼な振る舞いをしません。これは子供であっても同じです。もしその子が主について理解し、心から主を愛しているならば、無作法はしないのです。子供がこの理解と愛を学び取れるようにするのは、両親の責任です。もちろん教師は両親を援助しますが。

救い主はエルサレムの神殿に対して非常な畏敬の念を抱いておられ、そこを「わたしの父の家」と呼ばれました。そして、その畏敬の念を、きわめて印象的な方法で表

もし私たちが主を愛するならば、私たちは主に対してはもちろんのこと、主の家に対しても敬虔な気持ちを抱くはずです。



わしておられます。救い主がエルサレムに上られた時のことでした。

「……牛、羊、はとを売る者や両替する者などが宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、なわでむちを造り、羊も牛もみな宮から追だし、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし、はとを売る人々には『これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな』と言われた。」(ヨハネ 2:14-16)

この神権時代においても、主は改めて主の家の神聖なことを指摘しておられます。主は教会の初期の時代に、主のためにひとつの家を建てるように命じられましたが、その時に聖徒たちが主の家に対して畏敬の念を持たなければ、主はそこに留まらないことを明らかにされました。

「<sup>1</sup>而して、わが民主の名によりてわれに一つの家を建て、これを汚さざらんため穢れたるものをその中に入るを許さずば、わが栄光その家の上に留まらん。

<sup>2</sup>然り而して、その中にわれ入り来る故にわれその中に在るべし。されば、この家に入り来るすべての心清き者は神を見ん。

されど、もしわが家汚さるる時はわれその中に入り来らじ、さればわが栄光その家にあらざらん。そは汚れたる神殿には、われ入るを欲せざればなり。」(教義と聖約97:15-17)

ところで、家庭について申しあげたいのですが、家庭の中に敬虔さが無いのは、必ずしも子供たちのせいではありません。普

通、そこには、親の行動に問題がある、親が子供に十分教えていない、親が主の戒めを破っている、などの原因が見られます。主を心から愛し、お互いに対する振る舞いについて戒めを守っている親は、家庭にあっても敬虔な気持ちを抱いているものです。

教会員である私たちの第一の義務は、自分自身の中で神への愛を育てていくことです。そうすれば神に対する私たちの気持ちの中に、敬虔な思いが強まっていきます。子供たちに家庭や主の家に対して敬虔な気持ちを抱かせるには、まず私たちが戒めを守る必要があります。

父なる神と自分との関係を理解していれば、とても自分をないがしろにすることはできません。それは自分が神の子であることがわかるからです。パウロは当時の聖徒たちに、自分を大切にするように教えています。

「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。

もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。」(1コリント3:16-17)

心身と行ないを清めて自分自身に対する敬虔の念を養う上で、次の使徒ヨハネの言葉を完全に理解すること以上に、私たちを行動へと駆り立てるものはないのではないかと思います。

ヨハネはこう言っています。「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大

きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。

愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似る者となることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。」(Iヨハネ3:1-2)

そのすぐ後でヨハネは、この気高い教えに心を動かされた人の行ないについて次のように述べています。

「彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。」(Iヨハネ3:3)

この中でヨハネは、まことの神を知らない人々にはできないひとつの目標を示しています。神にまみえた時に私たちが神に似た者になれるという約束は、この望みを抱いている人々の心を動かし、自らを罪から清めるための行動へと駆り立てます。そしてこの望みは、約束を信じ、自分にだけでなく神と家庭に対しても敬虔の念を抱いているすべての人の心に働きかけるのです。

神権を尊ぶことについて少し触れたいと思います。旧約聖書の中に、私の話したいことを示すひとつの事件が記録されています。それは、サウルがダビデを捜してほら穴の入口に入って行った時に、ダビデがサウルに対してとった態度に関するものです。サウルは、ダビデが自分よりも民に好かれ

ていると思い、ダビデを殺そうとしていました。しかし、その時ダビデとその従者たちはほら穴の奥にいたので、サウルには見つかりませんでした。サウルは疲れたので、横になって休んでいました。ダビデの従者たちはそれを見つけて、ダビデにこのように告げました。

「『主があなたに告げて、「わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。あなたは自分の良いと思うことを彼にすることができる」と言われた日がきたのです』。そこでダビデは立って、ひそかに、サウルの上着のすそを切った。

しかし後になって、ダビデはサウルの上着のすそを切ったことに、心の責めを感じた。」(サムエル上24:4-5)

ダビデはサウルの首をはねることができたのではないか、サウルの目的はダビデを殺すことだったのだから、と思う人がいるかもしれませんが。しかし、ダビデはサウルを殺しませんでした。ただ上着のすそを切っただけでした。それでもダビデは自分のしたことを後悔しています。なぜでしょうか。その理由は、次の記録の中に説明されています。

「ダビデは従者たちに言った、『主が油を注がれたわが君に、わたしがこの事をするのを主は禁じられる。彼は主が油を注がれた者であるから、彼に敵して、わたしの手をのべるのは良くない』。

ダビデはこれらの言葉をもって従者たちを差し止め、サウルを撃つことを許さなか

った。サウルは立って、ほら穴を去り、道を進んだ。

ダビデもまた、そのあとから立ち、ほら穴を出て、サウルのうしろから呼ばわって、『わが君、王よ』と言った。サウルがうしろをふり向いた時、ダビデは地にひれ伏して拝した。

そしてダビデはサウルに言った、『どうして、あなたは「ダビデがあなたを害しようとしている」という人々の言葉を聞かれるのですか。

あなたは、この日、自分の目で、主があなたをきょう、ほら穴の中でわたしの手に渡されたのをごらんになりました。人々はわたしにあなたを殺すことを勧めたのですが、わたしは殺しませんでした。『わが君は主が油を注がれた方であるから、これに敵

して手をのべることはしない』とわたしは言いました。』(サムエル上24：6-10)

ダビデがこうした苦しい状況の中で取った行動は、神権を尊ぶこと、つまりは主の代わりを務める神権者を敬うことについて、大きな教訓を残していてくれるように私には思えます。

もし私たちが主を愛するならば、私たちは主に対してはもちろんのこと、主の家に対しても敬虔な気持ちを抱くはずです。また家庭に対しても、自分自身に対しても、神権に対しても敬虔の念を抱くはずです。

私たち自身が心の中に神の愛と、その愛を子供たちの心に伝えたいという望みを持つことができますように。そのようにしてこそ子供たちは見せかけでない、真の畏敬の念を育てていけるのです。

## ホームティーチャーへの提案

1. 敬虔の大切さについて自分の経験を話す。また家族の経験や感じていることを話してもらう。
2. このメッセージの中で、家族で読んだらよいと思われる聖句や言葉があるだろうか。ほかに家族と一緒に読んでみたいと思う聖句はないだろうか。
3. 主御自身と主の家、神権指導者、家庭、自分自身に対して畏敬の気持ちを表わす方法について話し合う。
4. □ム二副管長が説明している愛と敬虔ということの関係について話し合う。  
「敬虔さは神への愛が強くなればなるほど深まっていく」ということはなぜ真実なのだろうか。
5. 訪問する前に、家長と話し合っておく必要があるだろうか。敬虔ということについて、定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージがあるだろうか。

バ プテスマを受けてから数カ月の間に、私はモルモンの言葉をしばしば心に思い浮かべながら、みたまの導きに頼って生活するようになりました。「聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかがあなたたちに解る。……私はあなたたちが神の御力を拒まないことをすすめる。神は……世の人の信仰の強い弱いに応じて御力をもって働きたもう。」(モロナイ10：5-7) 聖霊の助けがなければ私たちはまったく無力な存在であると、身にしみて感じたのは、

それから間もなくのことでした。

1978年の1月、私は工場で熱心に働いていました。そこへ工場長がやって来て、私と他のふたりの従業員に、ペール室の仕事を片付けるように言いました。ペール室とは、厚紙類を粉碎したり、壊れた製品や古くなった製品をつぶしたりする所です。私はひとりの手を借りて梱包の作業を進め、他のひとりには2,500本のスプレーの缶を押しつぶす作業に取りかかりました。あたりには、スプレーの香りが充満しています。

# 炎の中で

スティーブ・チェリー



午前8時20分、梱包した鉄くずを運び出すためにフォークリフトが到着しました。

私がフォークリフトから60センチも離れていない所に立っていた時、作業員がリフトを前へ出すスイッチを押しました。突然、火炎放射器に点火したかのように、炎が噴き上がりました。フォークリフトの下から噴き出した最初の炎が私を襲い、たちまち部屋中が炎に包まれました。私は吹き飛ばされて、縦0.7メートル、横2.5メートル、深さ3メートルほどの穴の中に落ち込みました。

衣服はすでに燃えており、穴の中にも炎がまわっています。2,500本のスプレー缶がすさまじい勢いで爆発しました。

自分は死ぬんだと直感しました。その時突然、体の内面から力がわき上がってくるのを感じました。私は梱包機械にしがみつくと、炎に包まれた穴からはい出そうとしました。機械は焼けて熱く、よじ登ろうとするたびにつかんだ手に激しい痛みが走りました。それでも私は、内なる力に励まされて登り続けました。衣服はほとんど焼け落ちています。

部屋は惨たんたる有様で、他の従業員は見当たりません。私はモロナイ10:5-7を繰り返していました。この聖句に頼りきっていたのです。ようやく、爆発で壁に穴が空いているところを見つけ、そこから外に逃れました。後で人から聞いた話ですが、私が壁の穴から脱出した時、壁全体がくずれ落ちたそうです。しかし、私にはブロックひとつ当たらなかったということです。積み下ろし台の上にいる人がドアを開けてくれたので、私は工場の安全な場所に逃げ込むことができました。一緒にいた3人の従業員は見当たりません。しかし、彼らは裏口から外へ避難したことが、後でわか

りました。従業員の中に海軍で応急手当ての訓練を受けた人がいて、私に付き添ってくれました。

私は到着した救急車でただちに専門病院に運ばれました。数人の看護婦が焼け残った衣服を切り取り、湿った包帯をしてくれました。医師の診断によると、私は全身の43パーセントに2度から3度の火傷を負っていました。

最初の手当てが終わると、私はこう言いました。「私はモルモンです。祝福を受けたいのですが。」その日の午後、ふたりの宣教師が来て儀式を施してくれました。夕方には、監督とホームティーチャー、それに友人たちが見舞いに来て、私が生きのびるように、両手の機能が完全に回復するように、傷が急速に癒されるように、祝福してくれました。すると、炎に包まれた穴の中で感じたあの内なる力が再びよみがえり、私の体にとどまったのです。

それから2度ほど危篤に陥りましたが、私の心はいつも平安でした。これは祝福の結果だと信じています。入院してから2週間たつと、快方に向かい始めました。まさに奇跡的な回復でした。右腕と腰に皮膚を移植する予定日の2日前に、包帯をはずした専門医が、腕の火傷がほとんど治っているともしました。そこは皮膚が再生するとは考えられない箇所でした。「奇跡の腕をよく見せてくれたまえ。」医師は火傷があまりにも早く治ったことに驚嘆していました。私は5週間で退院しました。それは予定のおよそ半分の期間でした。

私が受けた内なる力は聖霊の力であって、この力を通して私は癒されました。この力がなかったなら、私は炎の中で焼け死んでいたことでしょう。

---

# 口を開きて

---

ジョー・J・クリステンセン



私たちが毎年ひとりの人を助けて真理に導くならば、20年後にどうなるか考えてみましょう。

1970年のことです。伝道部長として召された私は、妻のバーバラと子供たちを連れてメキシコ・シティーへ赴任しました。それから数日後に最初の宣教師大会が開かれ、その大会にジョセフ・フィールディング・スミス大管長とN・エルドン・タナー副管長、それにスペンサー・W・キンボール十二使徒定員会会長代理がそれぞれ姉妹を伴って出席されました。大会の後で、私はキンボール長老御夫妻を町の中心部にあるホテルまでお送りしました。途中でガソリンスタンドに寄ってガソリンを入れていると、インディアンの女性が車に近づいて来ました。彼女は裸足で、青い肩かけにくるんだ赤ん坊を抱いていました。ガムを売っているのです。私がいくつか買おうと求めると、札を言って、後ろの車の方へ歩いて行きました。キンボール長老が優しく静かな口調で私に貴重な教訓を与えて下さったのは、その時です。「伝道部長、あの姉妹に私たちがだれであるか知らせたほうがよくはありませんか。」

そうです、私はこの励ましの言葉を聞いて、私たちがイエス・キリストの代表者であることを、その女性に知らせたほうがよいと思いました。そこで窓ガラスを下げて彼女を呼び戻しました。私はガムをさらにいくつか買ってから、キンボール長老御夫妻を紹介しました。そして、キンボール長老が末日聖徒イエス・キリスト教会の十二使徒定員会の会員であることを説明しました。これまでに「モルモン」教会について

聞いたことがあるか尋ねてみると、あるという返事でした。彼女はメキシコ・シティーの郊外に住んでいて、「白いシャツを着た青年」すなわち宣教師を見たことがありました。私は、次の機会に宣教師たちから話を聞くように勧めました。彼女は、聞きまですと答えました。

彼女がその後、福音について学ぶ機会を得たかどうかはわかりません。しかし私はこの経験から、私たち末日聖徒は周囲の人人に自分が何者であるのか、とりわけ自分がどなたを代表しているのかを明確にすべきであると悟ったのです。

主は次のように述べておられます。

「誠にまことにわれ汝らに告ぐ、畑は早白くして刈り入れを待てり。これを以て、畑に汝の鎌を入れ、勢力を尽し、思を尽し、体力を尽して刈り入れを為せ。

汝ら口を開け、さらば満さるることを得ん。而して、汝らエルサレムより荒野を旅したる古えのニーファイの如くなるべし。

誠に汝ら口を開きてあらん限り説け。さらば汝らの背には刈り束を増し加えられん。見よ、われ汝らと共に在ればなり。

誠に汝ら口を開け、さらば満さるることを得ん。曰く『悔い改めよ、悔い改めよ。主の道を備え、その道筋を直くせよ。天国は近づきたればなり。』(教義と聖約33:7-10)

3つの節で「口を開け」という言葉を主が節ごとに繰り返しておられるのは、興味深いことです。「福音」を宣ぶるに……会

い見るを許されたるあらゆる人々の中に於てすべし。」(教義と聖約19:29) この戒めに従うのは、いつも容易なわけではありません。多くの人は恥ずかしがりやですし、知らない人に話しかけるのは実に勇気がいることだからです。しかしながら、福音のメッセージがすべての人に伝えられるべきものであるなら、私たちにできる最も重要なことはこれです。私たちが「口を開き」さえすれば、奇跡が起こり得るのです。

私たちが毎年ひとりの人を助けて真理に導き、その人も同じことを行なうように励まして行くなれば、20年後にどうなるか考えてみましょう。教会の成長率は驚くほど高くなります。

教会員が毎年2倍に増加した場合の成長率について知ったのは、最近のことです。帰還宣教師の同僚で、今はブリガム・ヤング大学で数学の教授を務めている友人がいるのですが、彼のもとを訪ねた時に、現在の成長率で教会が発展した場合、20年後に教会員数はどうなるかという興味深い計算の結果を教えてくださいました。それによると、ある国を例にとり今後20年間、教会が現在の成長率を維持していくと仮定すれば、紀元2000年までにその国の会員数は300万人を超えと言うのです。

後になってから、私は別の計算をしました。もし100人の教会員がいて、それぞれが毎年ひとりの人を福音に導き、その人も同じように毎年ひとりの人と福音を分かち合っていくならば、20年後の改宗者数は実に1億人以上になります。成長率が高まればこのような結果が生まれるのです。わずかひとりの教会員が毎年ひとりの人を教会に導き、導かれた人も同じように別の

人を導いていったとしても、20年後に新たに教会に加わる人の数は104万8千576人になります。

こうして考えてみると、キンボール大管長がなぜ次のように言われたのか、その理由が容易に理解できます。すなわち、私たち教会員は年にわずか数十万人の改宗者を出すことについて考えるのではなく、福音を学んで生活の中でその祝福にあずかることのできる数百万の人々の改宗について考えるべきなのです。私たちは周囲の人々に自分が何者であるか知らせるだけで、この業を大いに促進することができます。しかも「口を開き」さえすればよい場合が、しばしばあるのです。

1969年の夏、私は妻のバーバラと一緒にイタリアのローマで「音と光」のショーを見に行きました。ところが着いた時間が早すぎて、開演まで2時間も待つとのことでした。しかたなく椅子の前に立っていました。私たちの後ろには4人の女性がいて、そのうちのふたりはカトリックの尼僧でした。私と妻は、この素晴らしい女性と楽しく会話を交わしました。(事実、私がお会いしたカトリックの尼僧は立派な方ばかりです。彼らが皆、どこかの扶助協会に属していただけたらと思います)

それから、学生風の別のふたりの女性と話をしました。ふたりはアメリカ人で、夏休みにヨーロッパ旅行を楽しんでいるところでした。私はアメリカに帰ってから何をするつもりか尋ねました。キャシーという名前の少女は、大学院に行きたい、それもユタ大学に入学することを考えていると答えました。そこで私はこう言いました。「もしそうすることになったら、必ず私の家へ

# 口を開き/て

電話して下さい。我が家の夕食に招待しますから。私の家族に紹介して、大学やソルトレーク・シティーの周辺を案内してあげましょう。」

実を言えば、私はこの時の約束をすっかり忘れていたのです。ところが8月に電話がかかってきました。受話器の向こうから聞こえるのはキャシーの声です。私は彼女を家に招いて家族に紹介し、夕食を御馳走しました。そして、約束したことをすべて行ないました。彼女はユタ大学の大学院で研究に従事することをすでに決めていたのです。

翌年の春、私たちはメキシコへの伝道に召され、キャシーとの連絡は途絶えました。しかし毎年クリスマスになるとカードが送られてきました。それからおよそ3年後、彼女から届いたカードの裏にこう記されていました。「私は今、ブリガム・ヤング大学でダンスを教えています。今年の夏、バプテスマを受けて教会に入りました。すべてが変わりました。」その後、キャシーは神殿で結婚し、子供をもうけて福音を教え、今でも活発に教会に集っています。

メキシコ・シティー伝道部を管理するためにメキシコに赴任した時、宣教師としてそこで伝道してからほぼ20年の歳月が流れていました。かつて心から愛した人々とへ帰れるということで、私の胸は高鳴りました。特に訪れたいと思ったところは、私が伝道した美しい市、モレロス州のクエルナバカです。何年も昔に小さな支部を組織していた素晴らしい人々は、今も元気で教会に集っているのでしょうか。私の家族に会って欲しい、そして私の家族にも彼らを紹介したい、そう思いました。

メキシコに着いて間もなく、クエルナバカで地区大会が開かれると知って、私は大変喜びました。その日、私たちは早目に出かけて、昔の人々と非公式に話し合う機会を持つことにしました。何年も昔に知り合った立派な人々とメキシコ流の心の込もったあいさつを交わしました。それは胸の躍るような経験です。ひとり、またひとりと、抱き合っては軽く背中をたたき合うのです。

その中に、70歳ぐらに見える白髪の婦人がいました。彼女はあいさつを交わすと「私を覚えていらっしゃいますか」と言いました。

私は困惑しました。思い出せなかったのです。そこで謝って言いました。「申しわけありませんが、思い出すことができません。」

「いいえ、覚えていらっしゃるはずですよ。あなたは私を改宗して下さいましたのですから。」

私はますます困惑してしまいました。私が伝道中に改宗した人はそれほど多くなかったのも、その一人一人をはっきりと覚えているつもりでした。

「あの日のことを覚えていらっしゃいませんか。メキシコ・シティーからクエルナバカに向かうトリズモ（小型バス）の中でお会いした日のことを。」

思い出しました。メキシコ・シティーの伝道本部からクエルナバカにいる長老たちにメッセージを届けに行く途中、バスの中でその婦人と隣り合わせたのです。私はメキシコで何をしているのか尋ねられて、教会について少し話をし、信仰箇条を書いたカードを差し上げました。そして、彼女の名前と住所を教えてもらい、それをクエルナバカの宣教師に伝えることを承諾しても

りました。3カ月後に彼女は成人した子供たちと一緒にバプテスマを受け、やがて支部の扶助協会会長になりました。その間ずっと、クエルナバカの活発な教会員として集っていたのです。

地区大会のある集会で、証を述べるように頼まれた彼女は、次のように言いました。「福音を初めて聞いた日に、バプテスマを受けるように言われていたら、私は受けていたと思います。福音が真実であることを、その日に知ったからです。」

個人の力ではいかなる人も改宗できないというのは本当です。改宗はみたまによるものです。私たちが話しかけた人々に、いつみたまが証されるのかはわかりませんが、福音の真実性をみたまが証されるような状況を整えるのは、私たちの責任です。

メキシコ・シティー伝道部から帰還して間もなく、私は招待を受け、ボイド・K・パッカー長老と一緒にメキシコへ行って、教会教育部に関する調査を行ないました。到着したのは木曜日で、金曜日から土曜日までほとんど休む間もなく集会が続きました。そして日曜日にはパッカー長老の管理でステーキ部大会があり、日曜日の夜には、すっかり疲れ切っていました。パッカー長老はアメリカに帰り、私は月曜日に開かれるセミナー、インスティテュートのスーパーバイザーとの集会を管理するために残りました。

月曜日の朝、ホテルの会計を済ませると、タクシーで伝道本部へ向かいました。私は後ろのシートに身を沈めて書類に目を通していました。その時、たまたま運転手に目が止まり、最初はこう思いました。「私は忙しいし、疲れている。それに、彼は福音に

興味を示しそうにない。」都合のよい理由づけをしても私の心は晴れませんでした。キンボール大管長との経験について考え、メキシコ・シティーからクエルナバカへ向かうバスで会った婦人のことを思い出し、ついに私は身を乗り出して尋ねました。「メキシコ・シティーにずっとお住まいですか。」運転手は答えて言いました。「いいえ、私はオアハカの出身です。」

「メキシコ・シティーは、オアハカよりも住みやすいですか。」

「そんなことはありません、私はオアハカの生活の方が好きです。でも、私には子供が8人いるんです。長男はこの工業大学で、技術者になる勉強をしています。今年卒業する予定です。次男も同じように技術者になる勉強をしていて、来年卒業します。それに長女は、会計士になる勉強をしているんです。」

彼は子供たちをととても誇りに思っているようでした。それから私の方を向いて尋ねました。「メキシコ・シティーで何をしていらっしゃるんですか。」

「私は末日聖徒イエス・キリスト教会から特別な任務を受けてここに来ました。この教会についてお聞きになったことがありますか。」

運転手は額にしわを寄せて言いました。「カトリック教会のひとつですか?」

「いいえ、まったく違います。イエスはこの地上におられた時に、御自分が望まれる教会を組織されました。しかし、何年かたつと人々は教えから離れ、背教が起こってしまいました。やがて私たちの時代になり、みごころにかなう時が来ると、主は再び生ける予言者に御自身を顕され、地上に主の

# 口を開きて

教会を回復されたのです。これが私たちの信じていることです。」

この簡単な説明はわずか40秒ほどで終わりました。私は再びシートにもたれると、少なくとも「口を開いた」ことに満足感を覚えました。

気が付くと彼はスピードを落とし、肩越しに私を見て言いました。「よろしければ私の家に来て、今お話しになったことを家族に教えていただけませんか。」

「喜んでそうしたいのですが、私はきょうの午後2時の飛行機でたななければなりません。でも、これから行くところで3分間ほどお時間をいただければ、私の友人を紹介しましょう。そして、だれかがあなたの家を訪れて、家族の方にもっと詳しくお教えできるように手配しましょう。」

「わかりました。このタクシーは今から私が借りますから、私はどこへでも行きたいところへ行けます。さあ、参りましょう。」

私は車の中で、教会の伝道プログラムとその管理運営について説明しました。やがて車が止まると、私たちは伝道本部に入りました。私はエラン・コール伝道部長に、ヘルマン・ベラスケス氏を紹介しました。伝道部長は彼を温かく迎えてくれました。

訪問の約束を作ろうとしていた時、コール伝道部長は窓の外を見て驚きの声を挙げました。「おや、歩道を歩いて来るふたりの長老は、あなたのお住まいの近くで伝道している宣教師ですよ。」私の見ている前で、ヘルマン・ベラスケス氏は宣教師と会い、翌週の日曜日に訪問を受けて家族と一緒に福音を聞く約束をしました。

数週間後に、私はコール伝道部長から次

のような手紙を受け取りました。「先日、あなたが伝道本部にお連れしたタクシーの運転手について、その後の状況をお知りになりたいと思います。宣教師は彼の家族と、彼の兄弟の家族、それに彼の義理の兄弟の家族を教えています。先週の日曜日にはその中から11名の人が教会の集会に出席しました。素晴らしいことに、最も教会に関心を持っているのは、技術者になる勉強をしているふたりの息子さんです。」

6カ月後に私はメキシコ・シティに帰り、ヤングアダルト大会に出席しました。そこで聞くとことによれば、タクシーの運転手はまだ教会に加わっていませんが、技術者になる勉強をしている長男はすでにバプテスマを受けて祭司に聖任され、同じく次男もバプテスマを受けて教師に聖任されたとのことでした。いつの日か、さらに多くの人が教会に加わったという知らせを聞きたいものです。

予言者の勧告に正しく従うならば、すべての教会員はあらゆる場において宣教師になることができます。宣教師に紹介する人々を見つけるためにあらゆる努力をします。そして、教えを受け祝福にあずかった人々が、別の人々に福音をもたらすことができるように励みます。そうすれば、毎年教会に改宗する人々の数が、わずか数十万人ではなくて、数百万人となり、さらには数十億人になる日が来ることでしょう。

福音は、私たちが人々と分かち合うことのできる最も価値あるメッセージです。「あの姉妹(または兄弟)に、私たちがだれであるか知らせたほうがよくはありませんか。」

# 一通の手紙

メアリー・ヨハンセン

**手**紙を書くのに今までこれほど苦労したことはありませんでした。相手がどのような気持ちでこの手紙を受け取ってくれるかもわからずに、私は懸命になってふさわしい言葉を捜していたのです。

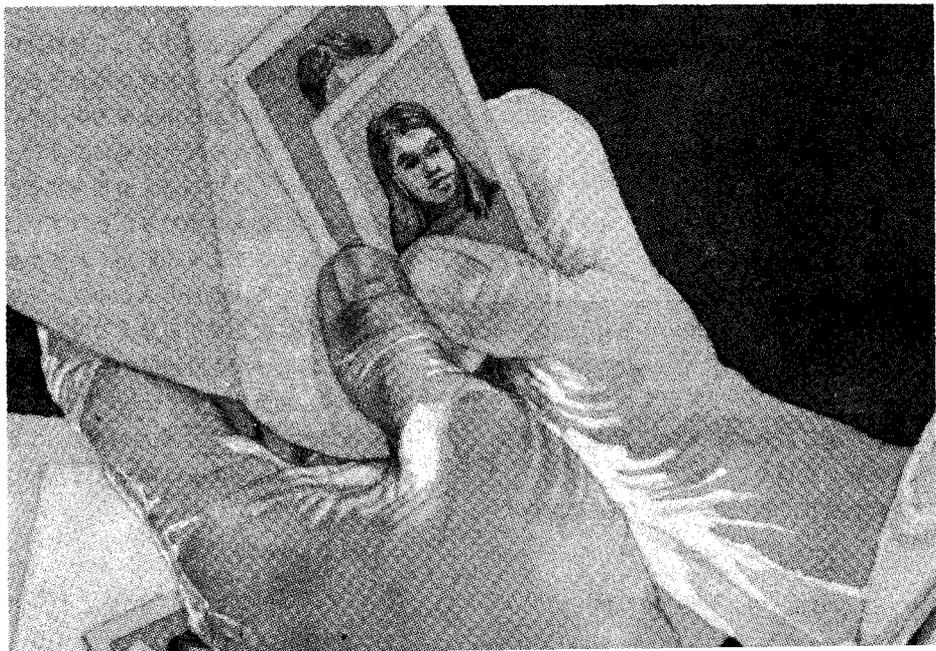
別れた夫の母との交信が絶たれてから、かれこれ5年になります。私は現在再婚を

しています。しかしこの5年の間、会うことも、便りを受け取ることもなかった義母に、連れてきた4人の子供たちの愛を何とかして伝えたいと考えてきました。

夫は私が別れた夫の母に手紙を書くことにあまり賛成ではありませんでした。それでも、「自分でしなければならないと感じたのなら、した方がいい」と言ってくれました。私の母はこう言いました。「古傷にさわるようなことはしないようにね。」

しかし私の心の中には何か私をせきたてるものがありました。一種独特のみたまがこうささやくのです。「あなたは孫たちが生きていて、皆健康で幸せに暮らしていることだけでも伝えるべきだ。」

そんなわけで、私は義母に手紙を書いた



のでした。私はできるだけ過去のことに触れずに、いつか子供たちを連れて家に行きたいとか、これからも家族同士で親しくしていきましょとかいったことを書きました。そして手紙と一緒に子供たちが学校で撮った写真を同封しました。

手紙が届いた時、義母のジューンは入院していました。手術をした跡が化膿し、そのために回復が遅れて、大分気落ちしていたようでした。そんなつらい毎日ですから、彼女が生きる気力をなくしたと言っても、だれも不思議に思うことはなかったでしょう。義母はそのような孤独で味気のない日々を送っていたのです。

義母の夫のビルはカードや手紙が届くたびにそれを彼女のところに持って行っていました。それでも彼女の気持ちは少しも晴晴としませんでした。感謝祭の始まる数日前に、ひとりの司祭が来て、最後の儀式を行ないました。回復する見込みがなかったからです。

ある日、ビルがいつものように手紙を持ってくると、祖母はそのうちの一通の手紙に目が奪われました。ビルが封を切ると、その中から子供たちの写真がベッドの上にこぼれ落ちてきました。ビルはすぐに拾いあげ、その写真に何度も口づけをしました。義母は体が弱っていて見るだけしかできませんでしたが、それでもまるで宝物をながめるように写真をしげしげと見つめ、目に涙を浮かべていました。

その日の午後、義母はこう言って看護婦

を驚かせました。「お腹がすいてるんだけど、何か食べる物を持ってきて下さいませんか。」こうして新たな生きる力を得た義母は、何十日ぶりかでベッドの上で体を起こしたのです。程なく、義母は手紙の返事も自分で書けるようになりました。その義母の手紙には、子供たちのことを読んでとても喜んだことや昔のことは忘れて、ただ孫と会う日を何よりも楽しみにしているということが書かれていました。

その年の夏、私たちはペンシルベニアに住むジューンとビルのもとを訪れ、愛と感謝の気持ちを伝えました。私の書いた手紙によって義母の命が救われたのかどうかはわかりませんが、主のみたまが手紙を書くようにささやいたことは事実です。しかも、自分でもやめようと思った時に、みたまが導きを与えて下さったことに深く感謝しています。

## 質問ゲーム

ノーラ・カールソン

**集** 会統合化スケジュールが行なわれるようになってから、日曜日の時間に余裕ができました。そこで私たちは、「モルモン・クイズ」というゲームを考案しました。

このゲームの目的は、聖餐会での話や歌を基に問題を作り、それにできるだけ多く答えるというものです。ルールは簡単です。

1. 家族一人一人が1枚の紙にひとつの質問とその答えを書く。
2. 紙を何かの容器に入れる。(我が家では祖母の柳細工の青い入れ物を使っています)
3. 教会で最も敬虔な態度を示した人が、紙を1枚引いて質問を読む。(小さな子供の場合は、大人が助けてあげます)
4. 得点をつける。質問ごとに正しく答えた人が1点を獲得する。質問が重複した場合は、一番年下の子供から答えることができる。

このゲームはとても簡単そうに思えます。しかし思い出してみてください、開会の讃美歌は何だったでしょうか、あるいは開会のお祈りの中で特に名前が出てきた人はだれだったでしょうか。新しい役員や教師の支持があったことと思いますが、だれが召されたでしょうか、そして新しい責任は何だったでしょうか。また、聖餐会での話を基にして教義的な質問をすることもできます。

このゲームを始めてから2、3週もしないうちに、聖餐会での敬虔さに劇的な変化が現われました。しかも、長い時間をかけずに今までにない感受性を養い、聴く耳をもたせることができたのです。

質問：スミス兄弟は、ワード部に何が必要だと仰いましたか。

答え：会員数の増加。(たまたま伝道がテ-

マの聖餐会でした) 15歳になる娘のエルシーが言いました。「答えはそれでいいけれど、私たちはそのために何をしているかしら。」いつの間にか、教会外の人々を招いてファイアサイドを開く計画を立てていました。

質問：家族はどれくらいの食糧を貯蔵しなければなりませんか。

答え：少なくとも1年分。長男が尋ねました。「お父さん、家にはそれだけあるの?」ここで調べるために、再び時間をとることになります。

質問：アルマにとって最大のチャレンジは何でしたか。

答え：道を誤った息子を助けること。私は子供たちが証を得ようと懸命になっている時に、彼らのために祈ったことを思い出して、夫と顔を見合わせました。すると、息子が目に涙をうかべて、兄弟たちを見ながら静かにこう言いました。「これはお父さんとお母さんが、ぼくのためにしてくれたことなんだ。」あの涙を忘れることはできません。息子が証を述べ、家族はそれを聞いて胸が一杯になりました。

日曜の夕べをこのようにして過ごすことにより、私たちは敬虔さと知識を増し、喜びを味わい、霊性を高めています。もちろん家族一人一人が毎週「モルモン・クイズ」を楽しみにしており、その場で聖餐会のみたまをもう一度味わっています。

# 祈りの証

スーザン・タナー・ホームズ

ある日の聖餐会でのことです。私はつくづく母親の教えの力を感じさせられました。その日は、クリント・ジョーダンという若い帰還宣教師が、自分の伝道と、その時経験した様様な出来事を話しました。

彼の話は私の心を引きつけました。彼は言いました。「母が祈りの本当の価値について教えてくれていなかったら、今話したようなことは何ひとつ経験できなかっただろうと思います。」

彼は続けました。「ぼくの耳の底には、母が繰り返し繰り返し教えてくれた、『クリント、怖いことなんか何もありません。独りになった時や、怖くなった時には、天のお父様がいつも一緒にいて下さることを思い出しなさい』というあの言葉が、まだ残っています。」

人生のうちで、何度も彼はその言葉に慰められ、力づけられたそうです。しかし、次の初めて祈りに対する答えを受けた話ほど、子供を早い内から教えることの大切さを私に強く感じさせたものではありませんでした。

彼は少年の頃、仕事をひとつ与えられていました。毎朝早く起きて3キロ程離れた所にある牧草地に行き、搾乳のために、牛をそこから家まで連れて来ることでした。美しい夜明けの光や、ヒマワリの葉の上で宝石のように輝く玉のような露が道行く彼を優しく包んでいました。

ある朝のことでした。その日は、いつもとは少し違っていただけです。地をほうような霧が一面に立ちこめていました。彼は牧草地へと歩いて行きましたが、霧はだんだんに深くなっていきました。まだ太陽が昇る前で、彼は次第に

霧の中にすっぽりと包まれてしまいました。彼は、込み上げて来る不安を押さえようと、口笛を吹き始めました。それでも、独りぼっちの彼は、粘りつくような暗闇の中で、身が震えてくるのを感じました。

霧の中に飲み込まれて、何もかも意識の中から消えていってしまうように感じたその時、彼は「怖いことなんか何もありません。天のお父様がいつも一緒にいて下さることを思い出しなさい」と言うお母さんの言葉を思い出したのです。

6歳のクリントは、霧で濡れた草の上にひざまずき、助けを求めて神に祈りました。疑うことを知らない彼の信仰が聞き届けられないはずはありません。静寂が彼を包み込みました。目を開けると、すぐ近くに、家の方へ行くときまよい歩いている一頭の牛が目に入りました。彼の心の中で小さな声がし、牛について行くようにとささやきました。クリントはそのしっぽにつかまって、間もなく、心安まる自分の家に着くことができました。そこにはお父さんが乳搾りの仕度をして待っていました。

こうして21歳の青年クリントは、私たちの前に立って、子供の頃に経験し、学んだことになんかに感謝しているかを話してくれたのです。彼は、試しにあった時や心に不安を覚えた時には、幼い頃のその出来事を思い起こして励ましとしました。彼は、自分には母親の教えをもとに築いた、祈りに対する強い証があると話しました。

その集会が終わって子供たちを呼び集める時にも、私の胸の中にはその証の言葉が印象深く残っていました。ひとりの母親とその息子の模範を聞いた私は、自分の小さな子供たちにも、祈りに対してあの帰還宣教師が持ったと同じ気持ちを持って育てようと、それまで以上に強く決意をしたのです。

# 女性の神権に対する正しい眼



ス ペンサー・W・キンボール大管長はファイアサイドで、教会の女性たちに向けてこうおっしゃいました。「私たちは神の霊の子供として、まったく平等でした。……とは言っても、役割と責任においては男性と女性の間大きな違いがあります。」（「聖徒の道」1980年3月号，pp. 140-41）

私たちは皆、それぞれこの地上でなすべき使命を持っていると信じています。教義と聖約121：25を少し私の言葉を付け加えて引用してみましょう。「そは<sup>なんび</sup>何人<sup>なんび</sup>にても（男性でも女性でも），ことごとくその<sup>な</sup>為<sup>な</sup>すところに<sup>ま</sup>従<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>る時定められたればなり。」

また、教義と聖約46：11-12には、こう

書かれています。「すべての者、必ずしもあらゆる<sup>は</sup>賜<sup>は</sup>を与えられしにあらず。何となれば、賜は多くあれどすべての人は神の『みたま』によりてその一を受くればなり。ある者はある賜をたまわり、また他の者には別の賜をたまわり、かくしてすべての者これによりて益を得るなり。」

私たちは、前世の会議において、地上に神の王国を建設する際に担う役割について、聖なる約束を交わしました。私はそのことを信じています。そして、私たちはその特別な業を遂行するに必要な賜と力を見返りとして約束されたのです。もう一度、キンボール大管長の言葉を引用したいと思います。「この地上に来る前のことを考えてみて下さい。忠実な男性が神権につけるある種の責任に予任されていたのと同じように、忠実な女性にも何らかの責任が課せられていました。それが何であるのか今すぐには思い出せなくても、かつて私たちが同意した栄えある事柄を変えることにはなりません。皆様には、私たちが予言者や使徒として支持している人々と同じように、前世で与えられた務めを果たす責任があるのです。」（同上，p. 141）その与えられた役割は、男性と女性では違うように、女性の中でも人によって違うと思います。

## パトリシア・T・ホランド

私たちは皆、理想像を持つように教えられています。あの人のようになりたいというような人がいることは、良いことです。しかし、あまりにも他のだれかのようになりたくないと望み過ぎることは、とても危険です。そのような時には、競争心からくる嫉妬と敗北感のとりこになるからです。同じ人はふたりといません。子供をたくさん授かった女性もいれば、子供の少ない女性もいますし、中には子供のいない女性もいます。妻となった多くの女性たちは、社会の指導者、仕事上の指導者、ステーキ部長、監督、教会幹部として働く夫を支持し、子供が成長できるよう励ますことによって、その賜や才能を磨いています。自らの権利として、直接自分の賜や才能を行使し、指導者として働いている女性もいます。また、直接間接に自分の役割を果たして賜を磨き、二重の働きをしている女性もいます。メアリー・フィールディング・スミスとエライザ・R・スノーが各々別の役割を持っていたことは、だれもが知っています。しかし、このふたりは、どちらも熱心に主のみこころを求めた女性でした。ふたり共、結婚して家族を持つことを求めました。そして、自分の持つすべてのものを王国のために捧げました。

このことを考えるに、私たちがなすことのできる最も偉大な業は、ふさわしい生活をして、主が私たちに望んでおられることを少しずつ理解していくことです。その際に留めなければならないことは、私たちが今日したいと望むことが、時として世の風潮や虚栄からの産物であり、遠い昔に誓約したこととは異なってしまっている場合があるということです。私たちは、天使がその役割を与えた時、「お言葉どおりこの身に成りますように」(ルカ1:38)と答えたイエスの母マリヤのように、積極的に生き、祈らなければならないのです。

ここで少し、ある人のことをお話したいと思います。以前、中央の若い女性の副会長として働いたアーデス・カップ姉妹が、私の家の西側の二軒先に住んでいらっしゃいます。皆さんも御存じのように、彼女は神の王国のために、本当に特異な貢献をなさった方です。アーデスは、私の知っている女性の中で、最も純粋で、優しく、強い女性のひとりです。彼女の夫のヒーバーは、私たちのステーキ部のステーキ部長として、とても力ある存在です。カップ御夫妻は、まだお子さんに恵まれていません。私の家の東側の二軒先には、ジョアン・クインが住んでいます。ジョアンも、私の知

っている中で最も純粹で、優しく、強い女性のひとりです。彼女は、周囲の人々すべてに大きな影響を与えています。彼女の夫のエドは、頭脳明晰かつ能力ある人で、私たちの生活に強い靈的な影響を与えてくれました。クイン御夫妻は、12人の子供に恵まれています。私と夫も、王国の中で私たちにできることをしています。私たちは、3人の子供に恵まれています。

私の知っている女性の何人かは、まだ伴侶、すなわち結婚の機会にも恵まれていません。しかし、彼女たちも毎日王国の建設のために働いており、顔を合わせるたびに私を祝福してくれます。また、4人の女性の例を挙げることができます。それは、キャロリン・ラスマスと私の大切な親友のマリリン・アーノルド、夫の才能ある秘書であり、公私共に私たちに尽くしてくれるランディ・グリーン、そして最近私が危篤状態に陥って、寸時を争う手術を受けた時に面倒をみてくれたパットという名の看護婦さんです。以上私が挙げた、私を祝福し、教会を賛美する女性たちは、明らかに前進し続けている女性たちです。今までお話して来たことを通して指摘したいことは、アーデスも、ジョアンも、キャロリンも、マリリンも、ランディも、パットも、皆々々違っているという点です。今、私たちはこの人生において、各々違った役割を持っています。そして、おそらくこの役割もまた何年かのうちには変わっていくでしょう。しかし私たちは皆、正しいことを望み、正しいことを追い求め、誠心誠意私たちが結んだ誓約と神様に心を向け、自分の持てるすべてのものを王国の建設のために捧げなければなりません。

もちろんそうするためには、祈り、勉強

し、正しい生活を送ることによって争いを避けると共に、利己的な目標を持たないようにすべきです。利己的な目標は、主が私たちのために計画して下さったことを台無しにし、私たちを主の計画からそらせてしまいます。と言うのは、利己的な目標に心を奪われると、主が私たちに授けたもうた使命を遂行することによってのみ訪れる不安や安心感を感じられず、挫折感や見捨てられたような気持ちを味わうことになるからです。自分の役割が何であれ、私たちはその役割を、正しい生活をし、啓示を受けることによって捜し求めなければならないのです。私たちは、肉の腕や人間の思想に寄り頼んではなりません。自分自身のリアホナを持たなければならないのです。これは、主が神権者に望んでおられることと全く同じことです。

私が強調したいのは、男女の役割の違いだけではなく、女性同士の役割の違いをも大事にするということです。そして、女性と女性に与えられた特別な役割との関係、男性とその神権の職務との関係について語る時は、権利よりも義務と責任について語る方がはるかに有益であると思います。腹藏のない所を言いますと、私は、闘争の権利、活動の権利、デモ行進の権利、男の権利、女の権利等々について話したり聞いたりすることには、あきあきしています。ですから、義務についてお話ししたいと思います。まず、アレクサンドル・ソルジェニツインの印象的な言葉を引用致します。「西側では、今、人間の権利よりも人間の義務を守る時である。」(『引き裂かれた世界』*National Review*「ナショナルレビュー」1978年7月7日号、p.838)

もし私たちが自分の責任を果たすならば、

権利は男性にも女性にも、おのずから守られることでしょう。以前、エール大学で学位を取得しようとする夫を助けていた頃、隣の精神医学を勉強していた方が、私には過労の兆候が見えると言いました。その頃、ジェフは普通なら4年で取得する学位を3年で取ろうとしていたばかりか、ステーキ部長会の一員でもあったのです。それに、家計を助けるためにエール大学でインスティテュートのクラスをふたつ教え、アムハースト大学でもひとつクラスを持ち、毎週145キロの道のりを通わなければなりません。私はふたりの赤ん坊と一緒に家において、若い既婚学生の乏しい家計のやりくりで四苦八苦していました。そして私も若かったのですが、扶助協会の会長として教会で熱心に働いていました。この特別な隣人は、私に関心を寄せ、私を助けようとしてこう言いました。「パット、権利を要求したらどう？こんなものみんな放り出して。」しかし、私は祈りを通して、私の権利は、それが何であれ、長期の目標を達成するという義務の上に成り立つものでなければならぬということを知っていました。私は、夫ジェフの学位が単に彼の将来のためだけのものだと、決して考えていませんでした。それに、彼も子供たちは私に任せっ放しにしておけばよいとは、決して考えていませんでした。私たちは、いつも協力し合っていました。そして、互いに権利を要求し合うことになど、エネルギーを費やしはしませんでした。当時の生活は、緊張し切った困難なものでしたが、それも3年だけでした。その3年間夫を支えるという役割を果たした直接の報酬として、今私は妻として、母親としての機会を楽しむほかに、時間と財産と私の興味を満足させ、才能を

私たちは皆、正しいことを望み、正しいことを追い求め、自分の持てるすべてのものを王国の建設のために捧げなければなりません。

伸ばす素晴らしい機会に恵まれています。私に与えられた究極の使命の中には、自分自身の役割を果たそうとする人を愛と知恵をもって助けることが含まれています。本当に素晴らしいことです。

もしあなたの役割がだれかを支える役割ならば——私たちの多くは、たびたびこの役割を担うのですが——勉強し、自分自身を備え、家庭を強めるということについて弁解がましいことは言わず、逆に個人の生活においても、社会においても、教会においても最も高い優先順位を占めるものを自分たちは追い求めているのだと、世の人々にはっきり宣言できるようにしておかなければなりません。

数カ月前のことですが、私は夫と共にイスラエルで、マホメット教徒、キリスト教徒、そしてユダヤ人のために開かれた2週間にわたるセミナーに出席しました。そのセミナーには、新聞社の主筆、前大使、僧侶、ラビ、大学の学長、教授などが出席していました。その2週間、ほとんどすべて

の出席者がモルモンの女性について私に質問をして来ました。その会に出席した他の奥様方も、家にいて子供を育て、私と同じような生活をしていらっしゃるのですが、質問的になったのは、どういうわけか私だけだったのです。

私たちは、注目されています。私たちは、山の上の光にならなければなりません。勉強し、備え、私たちが何を優先順位の第一に置いているのか、また真の教会の女性の特権とは何かを世の人々にはっきりと教えるために働くことは、私たちの責任なのです。

(権利とは反対に)義務について考える時、リパティーの牢獄でのジョセフ・スミスの経験を通して得られたあの万人の愛誦の啓示について深く考えてみてください。何の権利も与えられず、少しの自由もなく、権威を手ひどく侮辱されるような状況の中で、権利と自由と権威の行使について、このような深遠な啓示が与えられたことは、随分と皮肉なことではないでしょうか。そのような状況の中でこそ、主は本当に私たちの注意を集め、私たちの苦しみ(この場合はジョセフ・スミスの苦しみ)をメガホンとしてお使いになり、非常に大切な指示をお与えになるのだと思います。その指示は、教義と聖約の第121章に載っています。

(教義と聖約121:34—37, 39, 41—42, 45—46参照)

主は予言者ジョセフに権利についてお話しになりましたが(確かに主は権利について話しておられます)、その啓示には、義務と責任に関するあらゆる指示が付け加えられていたのです。そのことを銘記することは、とても大切なことだと思います。神権につける特権も、女性の持つ特権も、義務を果たさずに得られるものではありません。

教義と聖約の第121章第34節を心に留めて下さい。なぜ、そんなに多くの人々が召されるのに、選ばれる人がそんなに少ないのでしょうか。それは、「人々の心<sup>は</sup>甚しくこの世に属けるものの上にあり、唯々人間の誉<sup>を</sup>得ることをのみ望<sup>む</sup>」(教義と聖約121:35)むからです。

この世は、私たちの最後の住居ではありません。私たちは、この世に住み、建設的な生活を送らなければなりません、クリスチャンとして、この世のものになってしまつてはなりません。この世の誉れを追い求めてはならないのです。ここで、もう一度、キンボール大管長の言葉を引用しましょう。

「この教会に入って来る世の本当に勇氣ある女性たちの中に、自分の益のために生きるよりも、ひときわ義しい生活を追い求める女性たちがいます。この本当の勇氣ある女性たちは、本当の謙遜さを持っています。謙遜であるということは、外見よりも徳の高さに重きをおいているということです。他の女性に見られるためだけに何かを

もし私たちが自分の責任を果たすならば、権利は男性にも女性にも、おのずから守られることでしょう。

行なうことは、男性の目を引くために何かを行なうことと同じで、正しいことではありません。このことをよく覚えていただきたいと思います。」(「聖徒の道」1980年3月号, p.143)

この世は、私たちの永遠の住居ではありません。私たちは、この世のものに心を奪われてしまってはなりません。人の誉れを求めめるのではなく、神が与えて下さる誉れを求めなければなりません。今や、私たちはそれが末日聖徒イエス・キリスト教会にあることを知っているのですから、神の王国が神のみ手より転がり出て、天の王国が来たることを疑ってはならないのです。何者も、私たちをこの信仰とみ業からそらすことはできません。平和の君が勝利の帰還をなさることは、間違いのない事実なのです。私たちは、ひとつの重要な事柄を心に留めておかなければなりません。「曰く神権(女性)の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるものにして、天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり、と。」(教義と聖約121:36)

ここで主が使っておられる権能(権利)という言葉は、男性の権利とか女性の権利とかを表わす言葉ではないことは、興味深いことではないでしょうか。この節は、神権について述べられていますが、すべての女性が持つ権能(権利)や権力についても同じことが言えます。これは、すべての人に、——男女、黒人、白人、奴隸、自由人(IIニーファイ26:33)の別なく、当てはまるルールです。もし戒め——それは私たちがよく知っているものですが——を守るならば、やがて永遠の報いを手にする時が来て、神は男女の別なく戒めを守ったすべての人々に、「良い忠実な僕よ、よくやっ

た。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう」(マタイ25:21)と言われることでしよう。

主が義なる人々について語られた時、そこには性の違いによる闘争などはひとかけらもありませんでした。そのことを考える時、私は、なぜ末日聖徒の男女が、女性と神権というような議論に途方もないエネルギーを費やすのだらうと思うのです。

この私の疑問に対して、私自身の答えを述べたいと思います。もし争いが起こるとしたら、それは男女いずれにせよ、関係者の中にイエス・キリストの福音に従って生活していない人がいると思います。関係した人が皆福音に従っていないということではありません。そうかもしれませんし、そうでもないかも知れません。中にだれか福音に従って生活していない人がいるということなのです。どこで、どのようにしてかはわかりませんが、約束が守られなくなり、義務が尊ばれなくなって、傷口が開いてしまったのです。ともあれ、男女の別なく私たちすべての者の責任は、第121章に書かれているように生活し、キリストの模範に従って生きることです。男女の間に好ましい関係が築かれ、男女の関係のための約束事が守られるならば、苦しみや絶望や挫折は、この世から姿を消してしまうことでしよう。私は、心からそう信じています。私たちの問題に対する答えは、福音(神権)から出た答えであるべきで、男女いずれにせよ、人間から出た答えであってはなりません。そして、その答えは、忠実な人々への約束であるはずで、もう一度、45節と46節に書かれている美しい約束を、心に留めて下さい。

最後に、教会員ではない方の模範につい

世の聲に耳を傾けすぎると、  
私たちは混乱し、汚されて  
しまうでしょう。私たちは  
主のみたまに錨を降ろさな  
ければならないのです。

て、話させていただきたいと思います。ダリン・H・オクス学長（ブリガム・ヤング大学の前学長）が、私がこれまでお話ししてきた選びと義務について、心励まされるお話をして下さいました。皆さんも御存じのように、オクス学長は若い頃、法学部の教授として働かれ、現在合衆国最高裁判所で働いておられるルイス・M・パウエル判事と親しくしておられました。パウエル判事のお嬢さんは、立派な法律学校を卒業され、その後、法律家として第一歩を踏み出され、ほとんど同時に結婚なさいました。そして間もなく、最初のお子さんが生まれました。家族の友達として、彼女を気遣って電話をかけたオクス学長は、この若い母親が家にいて、ずっと子供と一緒に過ごしていたことを知って、うれしい驚きを禁じ得ませんでした。学長がその決心の理由を尋ねると、この若い女性はこう答えました。「あら、私、またいつか法律の仕事に戻りますわ。でも、今じゃありません。私にとって、問題は簡単なんです。私の依頼人

の世話ならだれでもできますけれど、この子の母親は私しかないんです。」何と的を射た鋭い答えでしょう。彼女が簡単に答えを出すことができたのは、まず第一に権利ではなく、責任を求めたからです。もし彼女が、「これは私の仕事です」「これは私の人生なんです」と言っていたとしたら、問題はそう簡単ではなかったでしょう。しかし、彼女の関心は「義務」にありました。そして、そのことを考えた時、答えは簡単に出すことができたのです。

私たちはだれでも権利と自由を追い求めることができます。主は私たちに豊かにそれを約束して下さいています。末日聖徒の女性は、無理に正しい選択をさせられたと感じたりすることのないように、むしろ自分の自由と自分の意志で選択するようになければなりません。これは非常に大切な点であると思います。何かの選択をする時に無理じいされて、苦痛や挫折感や憂うつを味わうことがあります。私たちは、勤勉に祈りの気持ちを持って、光を追い求めなければなりません。つまり、私たちが正しい決定をした時に得られる実りを智と情の双方から待ち望むように仕向けてくれる光です。私たちは、神が見たもうように私たちも見るように、すなわち永遠の見地に立って物事を見るように祈らなければなりません。世の聲に耳を傾けすぎると、私たちは混乱し、汚されてしまうでしょう。私たちは主のみたまに錨を降ろし、毎日用心して過ごさなければなりません。

\* 1980年2月1日にブリガム・ヤング大学で行なわれた女性の大会における話。ブリガム・ヤング大学出版局（BYU Press）の許可を得て掲載。

**私**が14歳で学年が変わったばかりの時、親しくしていた友達の妹が白血病で死んでしまいました。そのことを聞いた日、私は彼女がバスの停留所の所でほかの人々から離れてぼつんと立っている姿を遠くから見ていました。悲しみに沈んだ彼女の顔を見て、私は何とか慰めてあげたいと思いましたが、不意にその時の雰囲気気後れを感じ、結局何をするでもありませんでした。彼女は何年も前からの友達でしたが、私は何を言い、何をしてあげたらよいかさっぱりわからず、彼女と顔を合わせるのを避けていました。大分たって、悲しみも和らいできた頃、彼女は私にこう言いまし

た。「いつも変に思っていたことなんだけど、妹が死んだ時、あなたも含めて、だれも私に言葉をかけてくれなかったわ。」

言うまでもないことですが、天父は霊の子らを地上に遣わそうと備えをしていた時から、私たちがいつか悲しみを経験するようになることを御存じでした。私たちは悲しみ、病気、死などを避けて生きることはできません。これらの事柄に自分で立ち向かっていくこと以上に辛いことがあるとすれば、それはおそらく、親しい友がそうした困難に立ち向かおうとしている姿を見る時ではないでしょうか。友達のそのような姿を目にする時、私たちは自分には何もし

# 友達のために

アン・エドワーズ・キャンノン



てやれないのではないかと考えてしまうことがよくあります。そして、「一体何を言ってあげたらいいのかしら」「私にしてあげられることなんてあるのかしら」と自問するのです。残念なことですが、この無力感が原因で、多くの人が私がしたと同じような間違いをします。つまり、問題から目を背けてしまうのです。

聖典には私たちのなすべきことがはっきりと書かれています。救い主は言葉と行ないによって、悲しむ人に心を配らなければならぬと教えられました。例えば、ラザロの死を知らされた時の救い主の反応を考えてみて下さい。ヨハネは「イエスは涙を流された」とその時のことを書いています。(ヨハネ11:35) キリストは御自身の力をもってラザロを生き返らせることができたのに、それでもなお、マリヤやマルタを見て心を痛み、涙まで流されたのです。そしてキリストは、ラザロの死を悼む人々への思いやりの気持ちから、ラザロに命じて死の眠りから目覚めさせ、彼らの悲しみを和らげ、神の栄光を現わされました。

私たちはキリストのような奇跡を行なうことはできませんが、すべてのことにおいて、キリストの模範に従い、人々に愛を示すことができるのです。それでは、私たちは悲しみ苦しんでいる友達のために、どのようなことができるでしょうか。最も重要かつ最も難しいことのひとつとして、友人が直面しているその問題に自分も気づいているということを、言葉で率直に伝えることが挙げられると思います。私の先の友人はこう言いました。「あなたがたのだけれどもいいから、私のところに来て、『今度のこと、

気の毒だったわね』とだけでも言ってくれば、打ち解けることができたし、お互いの関係ももっと和やかになっていたと思うの。」何か悲しいことがあっても、それを意思の疎通を妨げる要因としないようにすることは、とても大切なことです。悲しむ人々にとって、思いやりのある言葉を聞くことほど、慰めとなるものはありません。

ただ、ここでひとつ注意しておかなければならないことがあります。私の友達のひとりにダグラスという名の男性がいます。ダグラスのお父さんは彼が13歳の頃、自動車事故で亡くなりました。その時、ダグラスにとってとても耐え難いことがひとつありました。それは彼の友達から「ぼくには君の気持ちが本当によくわかるよ」という言葉を聞くことでした。彼らが善意で言ってくれるのは承知していましたが、彼らの父親が死んだわけではないのですから、本当の気持ちなどわかるはずがなかったのです。結果的には、彼らの善意から出た言葉もダグラスには無神経な言葉としか聞こえなかったわけです。「気の毒だったね」という簡単な言葉の方がより適切だったのかもかもしれません。そしてもうひとつ、顔を合わせたら必ず悔やみの言葉を言わなければならないと考えていた人々も、ダグラスにとっては悩みの種でした。それでも、飾り気のない言葉をかけられて、本当のいたりや思いやりを感じた時には、自分の方から父親の死のことについて話したと言います。

相手の気持ちを思いやることと同様に大切なことがあります。それは、言葉だけで十分だと考えてはならないということです。

私たちはよく「私にできることがあったら何なりとおっしゃって下さい」と言うことがあります。ただ、それを言う方は確かにその積もりでも、言われた方としては、それに甘えて大切な時間を使わせてはならないと考え、なかなか言い出せないというのがほとんどではないでしょうか。頼まれなくても、自分から進んで何かをしてあげることが大切です。

ダイアナという女性がいます。ダイアナはとても苦しい状態にあった時に、進んで助けを与えてくれたひとりの友達のことをよく話してくれます。ダイアナは17歳の時にひどいうつ病になり、長い間その状態が続いて、最後には医者のお世話を受けなければならなくなりました。彼女の友達のレイチェルはそのことを聞くと、ダイアナが自分を必要としてきた時には、いつでもそれに応じようとすぐに決心しました。そしてふたりは今でも電話で話し合ったり、一緒に散歩やテニスをしたり、病気のことも含めていろいろな事柄について話をしたりしていますが、それはダイアナの心身が元通りの健康な状態に快復していく上でも役立ちました。

結論的に言うと、私たちは皆、悲しみに心をふさがれた状態というものが、かなり長い間続く場合があることを、はっきり認識しておく必要があるのです。精神的な苦しみはすぐに消え失せるとは限りません。長い時間を必要とすることがよくあります。それまで悩み苦しんでいた人が以前と同じ状態に戻ったように見えても、それだけのことで、もうあの人には特別な心配りをす

る必要はないだろうなどと思い込まないように注意しなければなりません。

スタンレーという男の子が次のような話をしてくれたことがあります。ある夏の日の昼下がり、スタンレーの弟は不幸な出来事に見舞われ、下半身不随になってしまいました。そのことが知れわたると、彼らの友達やワード部の会員たちはとてもよく励まし、いろいろと気を配ってくれました。ところが数週間もたたない内に、訪ねて来る人も助けを申し出てくれる人も、その数が次第に減ってきたのです。間もなく、スタンレーの家族はその不幸な出来事が原因で、周囲から取り残されたような気持ちになりました。今までに経験したこともない困難な事態を一人一人が、また家族が全体としてどう受け止めていったらよいかを見定めるにはまだまだ時間が必要だったので。親切な友達の助けが引き続いて与えられていたら、本当に助けになったことでしょう。

私たちは親しい友達の悲しみを取り除いてあげたいと思うことがありますが、それは決して簡単なことではありません。しかし私たちは真心を込めたいわりの言葉と行ないによって愛を示し、苦しみに立ち向かう友達を助けることはできます。助けを必要としている人々の気持ちを察してあげること、実際の行ないを通して愛を示すこと、また倦むことなくそれらの行ないを続けることなどは皆、愛する人々が人生の様々な出来事に取り組んでいくのを助ける上で大切なステップであり、私たちにもできることなのです。



# キャサリンの信仰

キャサリン・ジエーン・コットン・ロムニーの生涯

クリフォード・J・ストラットン

マーシャ・ロムニー・ストラットン

**時**は1888年の冬。所はメキシコのフアレレス植民地。ロムニー一家はまさに餓死寸前の状態でした。キャサリンの夫、マイルズが仕事を求めて家を出てから数カ月がたちました。キャサリンの儉約とやり繰りにもかかわらず、食糧はほとんど底をつく状態でした。キャサリンは祈りの気持ちでいろいろな方策を考えた末に、ついに12歳の息子のトーマスと14歳の息子のジョージを狩りに出すことにしました。これまで一度も銃を撃ったことのない少年を、しかも山深く送り出すことが危険極まりないことは十分承知していましたが、現実に向っているこの飢えを何としても、しのがなければなりません。ふたりの兄弟は家にあった44口径のウィンチェスター・ライフル銃を持って、意気陽々とスプリング溪谷めがけて旅立ったのです。

約1.5キロ、溪谷を登っていった時、突然前方の開けた地、約70メートル先に1頭の

雄じかが立っていました。ジョージは急いでねらいを定め、引き金を引きました。ところがどうしたことが、その雄じかは振り向いてじっとこちらを見ているだけです。明らかに鉄砲の音をいぶかしく思っているようでした。続いてジョージはしかの体の真中にねらいを定めて2発目を撃ちました。ところがそれがちょうど両目の間に命中したのです。

興奮がさめ、ふとわれに返ってみると、ふたり共ナイフを持ってきていないことに気づきました。雄じかを家に運んで帰のですが、ナイフがなければどうしようもありません。そこでジョージがナイフを取りに家に帰り、その間トーマスがしかを見ていることにしました。これもまた大変なことでした。というのは、ジョージは裸足だったので、足が凍ってしまわないように走るか、歩かして、いつも足を動かしていなければならなかったからです。

ジョージが11歳と10歳のふたりの弟を連れて帰って来た頃には雪が降っていました。でも弟たちも裸足です。少年たちはしかを切り裂くのに十分な力がないので、6キロの道程を引っ張って帰ることにしました。しかし、数メートル進んでは休み、また数メートル進んでは休むといったことの繰り返しでした。しばらくしてキャサリンが加わりましたが、それでも一向にはかどりません。近所のヒラマン・ブラット兄弟が運搬用のラバを連れて助けに来てくれたのはそんな時でした。みんなはブラット兄弟の姿を見て、心から感謝しました。ブラット兄弟は、しかを撃った話を聞き、助けに来たのです。

その晩の夕食には今まで食べたこともないしかの肉の御馳走が山のように並べられていました。

この話は家族の宝として受け継がれ、子から孫へと語り継がれていきました。そうした孫たちの中に、後にスペンサー・W・キンボールと結婚したカミラ・アイリングがいたのです。

そのような話の中で、人々の語り草となったのがキャサリンに関するエピソードでした。キャサリンは、開拓者であった両親がソルトレークに到着して6カ月たった1855年の1月7日に生まれました。そしてキャサリンが7歳の時、一家はユタ州のセントジョージの居住区を援助するために召されて行くことになりました。最初のクリスマスを迎えたのは、確かユタ州のディクシーだったと思います。くつ下の中には、糖みつのキャンディーが2、3個、干しぶどうが少々と薄切りにしたりんごが一切れ入っていました。皆、お母さんがわざわざソルトレーク・シティから持ってきたもの

でした。お父さんは自分で木を削って13個の人形を作り、それに近所に住む絵の上手な人に顔や髪の毛を描いてもらいました。クリスマスの時に、その人形を子供たちにプレゼントとして贈ったのでした。

キャサリンは19歳の時、ソルトレーク・シティのエンダウメント・ハウスで、マイルズ・パーク・ロムニーと結婚しました。当時キャサリンはばら色のほおをし、目は茶色で、腰のところまでくる長い髪をした穏やかな美しい女性だったようです。キャサリンはまた「決して自分の感情を表に出さない人」としても有名でした。そしてマイルズとの間に9人の子供をもうけました。

キャサリンは非常に強い信仰を持っていましたが、何度かその信仰を試される場面に遭遇しました。ある日、主人のマイルズが家を空けた時のことです。3番目の子供で3歳になる息子のジュニアスがひどい耳の病気にかかり、キャサリンは息子がそのまま死んでしまうのではないかと思いました。なすすべを失って、キャサリンは主に助けを求めました。その結果、ステーキ部の祝福師に祝福を頼むようにという靈感を受けました。キャサリンはジュニアスを毛布にくるむと急いで祝福師のところに連れていきました。その祝福の中で、キャサリンがこれからも強い信仰を持ち続けるならば、ジュニアスの耳は回復し、ジュニアスはやがて教会の偉大な指導者になるであろうという約束を受けたのです。また驚いたことに、祝福師の祝福が始まるとジュニアスは泣きやみ、すやすやと深い眠りに落ちていきました。ここ数週間なかったことです。そのジュニアスはやがて6人の子供を育て、まだ20代の時にメキシコのフアレステーキ部のステーキ部長になりました。

ある時、息子のひとりが馬車から振り落とされたことがありました。その拍子に車輪の鉄枠に頭をこすり、耳を切り落としてしまいました。キャサリンは落ちた耳を頭にくっつけ、ストッキングでしっかりと固定しました。耳は完全によくになり、その子が大きくなった頃には、けがをしたのがどちらの耳か、だれも見分けがつかないほどでした。

1881年、ロムニー一家はアリゾナに移りました。当時、アリゾナの開拓地はならず者が多く、特に末日聖徒に対する迫害は目にあまるものがありました。開拓地に到着して間もなく、教会員のナサム・クラム・テニーがならず者の決闘の仲裁に入ろうとして銃で撃たれました。

ロムニー一家に対する迫害は特にひどかったようです。それもマイルズが雄弁であり、自分の主張を恐れることなく新聞に書き続けたからです。ある日の午後、マイルズはふたりのならず者にしたたかになぐられ、気を失ってしまいました。そして、その場に残された幼ない子供たちは、何キロも助けを求めて歩かなければなりません。ある時にはセントジョンズのならず者から、マイルズの首に数千ドルの賞金がかけられたこともありました。またある時には、暴徒が家に向かって発砲し、キャサリンは思わず子供たちをソファと壁の間に隠したほどでした。

やがて、マイルズはソルトレーク・シティに行き、状況をブリガム・ヤングに報告しました。その後末日聖徒がさらに数家族セントジョンズに移ってきて、ようやくモルモンとモルモンを迫害する者たちとの間の力の均衡がとれるようになりました。

ところが、それでもなおロムニー一家に

対する迫害は一向に弱まる気配を見せませんでした。ついに十二使徒定員会のジョン・テイラーがマイルズにメキシコに移るよう勧めてきました。マイルズがメキシコで家を建てている間、キャサリンは子供たちを連れてセントジョージに引き揚げ、そこで2年間を過ごすことにしました。こうして迫害から逃れて彼女の両親の家で過ごしていたウイルフォード・ウッドラフ大管長とも会いました。

メキシコへは汽車で行きましたが、途中で子供たちが何人かしょう紅熱にかかり、そのうちクラウデはメキシコのフアレス植民地に到着して間もなく、肺炎で死にました。

メキシコでの最初の家は川縁の丸太小屋でした。キャサリンは美しいものに対するあこがれを殊の外求める人でしたが、川縁を散策し、野の花を摘んだり、かごを編んだりすれば、十分心を満喫させることができました。また両親と一緒に歌を歌うタベなどは子供たちにとって忘れ難いものとなりました。キャサリンの声は美しいソプラノで、ピクニックやパーティー、ダンス、そして演劇、またキャンディーを作る時などいつも聞こえてきます。そのほか家族で話をしたり、数人と語り合ったりもしました。

1902年、マイルズが心臓発作を起こし、その時は一命をとりとめたものの、それから2年後、2度目の発作で亡くなりました。娘のルナは、その年のクリスマスはツリーもなかったが、プレゼントだけはくつ下の中に入っていたと言っています。ルナはこうも言っています。「おそらく、ひどくがっかりした顔をしていたんでしょうね。母から、朝食が終わったら、お使いをするように頼まれたのです。でも、あまり遠いので、

気が進みませんでした。線路の向こう側にいる、まだ一度も会ったことのない老夫婦のもとへ行くのです。しかも、足の悪い弟を日曜学校に連れていく時に使っていたあの赤い手押し車を引っ張っていくのです。母が手押し車に毛布と枕、それからクリスマスの御馳走の七面鳥とじゃがいも、野菜、ドーナッツ、バターなどを積み込むのを、私はそばでじっと見ていました。

母はこう言いました。『戸をたたいてね、「メリー・クリスマス」って言うだけでいいの。そしたらすぐに帰って来て遊んでもいいわよ。』

平原にぼつんと立っている土でできた小屋を見つけるのはさほど難しくはありませんでした。戸をたたくと、背の低い老婦人が出て来ました。

『メリー・クリスマス！』私はそう言いました。

『まあ、かわいい天使さんみたいですわね』と老婦人は言って、私に口づけをしました。入口には階段がないので、老婦人は荷物を降ろすために手押し車をそのまま家の中に引っ張って行きました。家の中では、白くて長いあごひげをはやした老人が腰を下ろして、暖炉の火をじっと見やっていました。

『ジョン、ご覧なさいよ。神様がこんなものを送って下さいました。』

私はこのおばあさんは何て馬鹿なこと言うんだろうと思いました。これを持って行くように言ったのは神様ではなくて、私のお母さんののに。しかし、老人は無言のまま、見上げようとしませんでした。耳が遠かったのです。食卓には粗末な朝食の残りがまだ置いてありました。その残り物を指差しながら、老婦人は言いました。『ご覧なさい。皆さんの心づくしがなければ、

これが私たちの食事だったのですよ。』

別れ際にもう一回口づけされて、私は家をあとにしましたが、体中を平安な温かい気持ちの流れわたっていくように感じました。そして母がクリスマスの日にこの老夫婦の飢えを守るために私を送ってくれたことに心から感謝しました。帰り道も跳びはねるようにして家に帰りました。その晩のクリスマスの食事ほどおいしい食事をしたことはありませんでした。』

メキシコ革命の最中に、キャサリンは15分以内に立ち退くようにとの命令を受けました。皿や食器を地に埋め、オープンには焼きかけのケーキを、またレンジにはチキンのフライを残して彼女は家を後にしました。

日用品の入ったトランク1個と毛布1巻だけを持って、キャサリンは信仰のゆえに追われてきて住むようになったこの4番目の家の戸を静かに閉めて去ったのです。家を去る時、ふたりの娘たちが馬車の上に立って、「み恵み 数えあげ」と歌い始めました。ルガが母の方に目をやると、母はほおを涙でぬらして夫の墓に最後の別れをし、それから子供たちを見てにっこりとほほ笑みかけました。

キャサリンは病気で体が動かなくなるまで、セントジョージ神殿で働きました。病気が重くなると、キャサリンは子供たちを枕元に呼び寄せ、自分のために祈ってくれるように頼みました。子供たちをベッドの周りにひざまずかせ、自分の病気がよくなるように、そうでなければ幕の彼方にいる夫や息子のそばに行けるように祈ってくれと頼んだのです。それから程なくして、1918年1月6日、キャサリンは静かに息を引き取りました。

# か 彼の人々を見いだして



七十人第一定員会会長会  
ロイデン・G・デリック

**私**の曾祖母ウルスラ・ワイズ・デリックはととても素晴らしい人でした。家族の記録によると、彼女は1799年頃、イギリスのサマーセットシャー、プリストルの南12キロほどの所にある小さな町ケインズハムで生まれました。子供は11人。末のふたりは双子で、エリザベスとザカリヤといいました。エリザベスは生後間もなく死んでしまったようです。

ザカリヤは14歳の時に、プリストル製鉄所に見習い機械工として雇われましたが、その見習い期間が終わる時には、鑄造工となっていました。

ザカリヤにとって、この年は重要な年でした。新たに鑄造工になったということと、もうひとつ、彼はこの年にメアリー・シェパードという女性と結婚したのです。結婚後間もなく、ザカリヤの母親が重い病気にかかりました。死期の近いことを感じた母親は、息子をベッドのそばに呼び、絶対どの教会にも入らないようにと言いつけました。当時彼らの周りにあった教会は、どれもキリストの真の教会ではないと言うのです。そして、集会場や街角で、神の示現を受けたという新しい予言者について説きながらやって来るふたり連れの宣教師たちのことを聞いたら、彼らの教会こそ神の真の教

会だから、その教会に加わるようにと言いつけました。

ウルスラ・ワイズ・デリックが亡くなったのは、ヒーバー・C・キンボールを初めてとする宣教師の一行が、イギリスの人々に回復のおとずれを伝えようと、320キロ北のリバプールに到着したその前の年、1836年のことでした。プリストルの町に回復された福音がもたらされたのは、それから7年後のことです。

そのようなことを天から知らされていたということ考えると、彼女が非常に霊的な人だったことは間違いありません。彼女は神権を持つ人からバプテスマを受ける機会なくこの世を去りましたが、救い主はこう言っておられます。「よくよくあなたに言うておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国に入ることはできない。」

(ヨハネ3:5) 私は曾祖母がどうなったのか知りたいと思い、聖典をずっと調べてきました。

予言者イザヤは、「捕われ人に放免を告げ」るために、救い主が遣わされるであろうと予言しました。ジョセフ・F・スミス大管長も死者の贖いに関する示現の中で、キリストの復活前にこの世を去った人々について、「死すべき世にあった間イエスの証

に忠実であった者たち」に「神の御子が現われ……忠実であった捕らわれ人に自由を宣言」されたと言っています。(ジョセフ・F・スミス——死者の贖いに関する示現12, 18) この人々は何に捕らわれていたのでしょうか。死に捕らわれていたのです。キリストが人類の罪を贖い、復活の初穂となられるまで、だれも復活することはできませんでした。

ウルスラはキリストよりも何世紀も後の人ですが、救い主の復活は、その後にくるすべての人々のひな型です。

私がまだ子供の頃ですが、我が家の者はおじのオルソンが再び戻って来る日を待ちわびていました。私の母親もそのことを随分と考え、事のいきさつを私たち子供にも話してくれました。私も私なりの理由があって、オルソンおじが我が家の裏口を開けて帰って来る日を待っていました。よく物売りの人が勝手口から入って来たものですが、私はその度に母の服を引っ張り、「この人、オルソンおじさんじゃないの？」と聞いたことを覚えています。そんな時、母の答えはいつも同じで首を横に振るだけでした。

母がオルソンおじのことについて私たちに話してくれたのは、大分たってからのことです。彼は1881年に生まれましたが、1歳2カ月の時、父親を亡くしました。彼は人生の初めの大切な時期に、父親からの指導を受けることができなかつたのです。17歳のある時、彼は同じ年の仲間と一緒にソルトレーク郊外で催されたあるダンスパーティーに出かけました。ところがその夜、彼らは酒を飲んで酔ったあげく、留置所に入れられてしまいました。

翌日、親や家族の者たちは留置所に行っ

て、自分の息子たちを釈放してもらいました。多くの親は子供たちを暖かく迎え入れ、善良な市民になれるように励ましました。ところがオルソンおじの場合は、母親に何の連絡もないままに釈放され、北西部(訳注：特にワシントン、オレゴン、アイダホの3州)行きの片道切符を1枚つかまされると、2度とここへは戻って来るなど言い渡されたのです。

母は祖母が夜中にベッドの中で泣き声を挙げているのをよく聞いたと言います。そして、寝室へ入って行くと、「あの子は今、どこで何をしているのだろうか」と問わず語りに話をしたそうです。

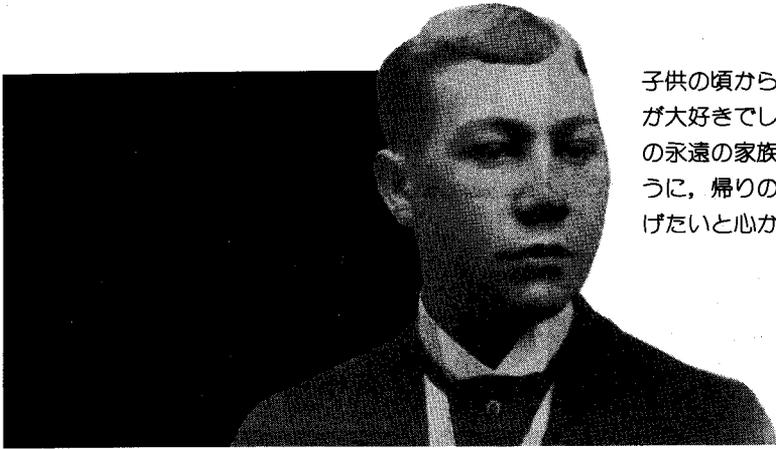
オルソンおじは北西部のある材木の切り出し現場で働いていたようですが、福音の教えにそった生活をするには難しい環境だったことでしょう。もし生きていたとしたら、かなりの高齢ですが、おそらく今は霊界にいるのではないのでしょうか。聖典を読む時、やはり、オルソンおじがどうしているかということを考えます。

イザヤはこう言っています。「彼らは囚人が土ろうの中に集められるように集められて、獄屋の中に閉ざされ、多くの日を経て後、罰せられる。」(イザヤ24:22)

救い主は十字架上で亡くなられてから、復活されるまでの間に、「義人の中から軍勢を組織し、使者を任命して権威と権能とを与え、闇の中にいる者たち……に福音の光を携えて行くよう命じられ」ました。(ジョセフ・F・スミス——死者の贖いに関する示現30)

これもまた、キリストの復活後にこの世を去った人々に、そのまま適用されるひとつのひな型です。

私の良き友であった、ジョセフ・S・ネ



子供の頃からずっと彼のことが大好きでした。おじが自分の永遠の家族の中に戻れるように、帰りの切符を買ってあげたいと心から願っています。

ルソン兄弟が数カ月前、86歳でこの世の生涯を終えました。彼は死ぬまで素晴らしい宣教師でした。最後に召しを受けたのは80歳の時でしたが、それを含めて4度伝道に出ています。彼のような人について聖典には、どう記されているでしょうか。

「私は、この神権時代の忠実な長老たちが、死者の霊の住む広大な世界において闇に包まれ罪のかせにつながれている者たちの間で悔い改めの福音と神の生きたまいし独り子の犠牲を通じてもたらされた贖いの福音を、この世を去った後も引き続き宣べ伝えているのを見た。」(ジョセフ・F・スミス——死者の贖いに関する示現57)

私は曾祖母のウルスラ・ワイズ・デリックを愛しています。彼女は素晴らしい人だったに違いありません。彼女が「死すべき世にあった間イエスの証に忠実であった」ことは疑うべくもありません。(ジョセフ・F・スミス——死者の贖いに関する示現12)しかし彼女は、人に「死の縄目からの贖い」をもたらす救いの儀式を受ける機会には恵まれませんでした。(ジョセフ・F・スミス——死者の贖いに関する示現16)

私はおじに対してあこがれを持っていて、

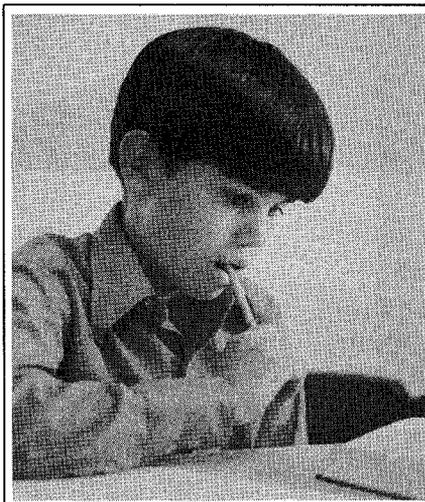
子供の頃からずっと彼のことが大好きでした。おじが自分の永遠の家族の中に戻れるように、帰りの切符を買ってあげたいと心から願っています。

私はひょっとして、ネルソン兄弟が私の曾祖母に会って、イエス・キリストの素晴らしい真理の福音を教え、私たちが彼女のために執行した救いの儀式の祝福にあずかれるようにしてくれているのではないかと考えています。

また、オルソンおじも彼に出会い、もし父親が生きていたらこの現世で学んでいたかも知れない福音の真の教えを彼から聞いているのではと考えることもあります。おじはあの片道切符をつかまされたばかりに、頼みとなる人々から遠く離されてしまいましたが、それさえなければ、福音の真理を教えられていたかも知れません。私はおじが今、その機会に恵まれるようにと祈っています。

ネルソン兄弟、どうか彼の人々を見だし、私たちの家族が永遠の絆で結ばれるように、彼らに貴い救いの真理を教えてください。これは私の心からの願いです。

# キンボール大管長, 若人



それは、現在皆さんの生きている時代が、葛藤<sup>かつとう</sup>や困難の多い時代である

**愛**する若人の皆さん、皆さんは何と恵まれた世界に住んでいることでしょう。皆さんの前途には洋々たる機会が待ち受けています。

人生の中で初めの10年間というものは、喜びに満ち、幸福で、勝手気ままも許される時代でした。両親や家族の保護のもとに教えられ、養われ、衣服を与えられて庇護されてきました。しかし今では皆さんは十代となり、しつけのためにとやかく言われることも少なくなりました。人格も次第に身につく、自ら決断を下さねばならない機会も少しずつ増えてきています。皆さんはそのようにして成熟し、責任も引き受けられるようになってきました。そしてしばらくすれば、生涯を左右するような重要な決

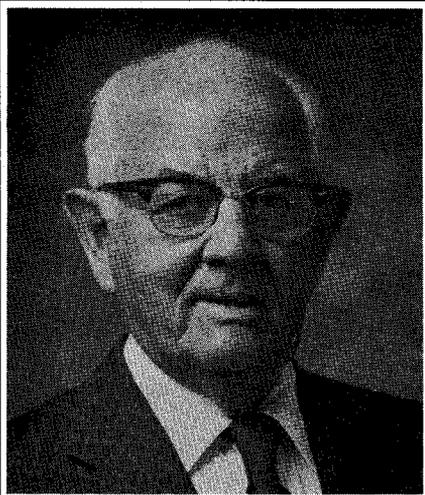
断をしなければならないでしょう。それは進歩発展へとつながる将来を築くことになれば、暗たんとした進歩のない人生に迷い込んでしまう結果ともなるのです。

他の人々が、皆さんの決断に際して援助をすることができるにしても、決断をしなければならないのは、やはり皆さん自身であり、その決意を守り通してゆかねばならないのもまた皆さん自身なのです。自由意志の原則により皆さんに選択の権利はありますが、誤った決断がもたらす損失や苦痛を免れる道はありません。皆さんはひとたび人生の走路に足を踏み出したなら、そこから引き返してくるのは容易なことではありません。殊に、同じ道を行く人が他にたくさんいる場合とか、下り坂にかかったよ

# の人生設計を語る

と同時に、大いなる機会に恵まれた時代でもあるということです。

大管長  
スペンサー・W・キンボール



うな道に迷い込んだ場合などはなおさらです。

人生を栄えあるものとするのも、台無しにしてしまうのも、皆さん次第なのです。もしも皆さんの人生が、実りがなく、価値もなく、不完全な、望ましいものとなっても他のだれをも責めるわけにはいきません。その責めは皆さん個人にのみ降りかかってくるのです。他の人々は皆さんを援助することもあれば、時には邪魔をすることもあるでしょう。しかし、その責任は皆さんが負わねばなりません。皆さんは自分の人生を、偉大なものとも、平凡なものとも、また失敗の人生ともできるのです。

私は、雨量の少ない乾燥した地域に育ちました。夏期の間中、食糧用の穀物が育つ時期に十分な雨が降ったことがほとんどな

く、乾ききった用水路や幾万ヘクタールもの干あがった土地へ十分な水を保給することはできませんでした。全部の穀物にまんべんなく水を送ることは不可能だったのです。

私たちは雨を求めて祈るようになりました。そして、いつも祈りました。

私はまだ年端もゆかない時に、乾燥した地域では植物に水をやらなければ、大抵2、3週間ともたないことを知りました。私は家から1ブロック程離れた所を流れる共同用水「ビッグ・ディッチ」へ、とかげと呼ばれる一種の枝分かれした丸太に樽をのせ、老練な雌馬を使って水をくみに行くことを習い覚えしました。私はその小さな流れや水のたまったところからバケツで水をすくいあげ、樽を満たしては馬で引いて行きまし

た。そうして、バケツ一杯のこの貴重な液体を、バラヤスマレなどの花やかん木、いけ垣、植えたばかりの木などに与えました。水はまさに「黄金」の液体でしたから、水を貯めておく場所というものは私の生活においてとても重要な位置を占めていました。

私たちの時代には、いろいろな種類の貯蔵庫が必要です。あるものは水を貯めておく貯水槽、あるものは現在家庭貯蔵プログラムで行なっているような食糧貯蔵庫、またあるものはちょうどエジプトのヨセフが7年間の欠乏と飢饉に備えてその前の7年間の作物を蓄えておいた貯蔵庫のようなものもあります。

しかしそれだけでなく、将来の必要に備えて、知識の貯蔵庫もなければなりません。また、人生に不安をまきちらすものに恐れという洪水がありますが、それを克服するための勇気の貯蔵庫、細菌などの汚染にも負けない体力の蓄え、また善の蓄えやスタミナの蓄え、そして信仰の蓄え——そうです。世の荒波を乗り切ってゆかなければならない時に、確固として力強く立つための信仰の蓄えが必要なのです。まわりの退廃した世の中が生み出す誘惑が私たちの活力を抜き取り、靈性を弱め、この世の水準にまで私たちを引き下げようとする時でも、私たちには、若人が理想と現実のギャップに悩む十代の時期や、その後の問題の多い時期を立派に進んで行けるよう励ます責任があります。そのためには信仰の蓄えがなければなりません。また、単調な日々、困難な時、恐れのある時、失望した時、幻滅を感じた時、逆境の時、貧苦、混乱、挫折の時にも私たちを導き励ます信仰の蓄えがなければなりません。では、どのようにしたら私たちの貯蔵庫を一杯にすることがで

それでは一体どのような知識に力があり、またどのような力がその知識から生まれてくるのでしょうか。

きるのでしょうか。

皆さんは世の中を鋭く観察できる年代の末日聖徒として、はっきり理解できることがひとつあると思います。それは、現在皆さんの生きている時代が、葛藤や困難の多い時代であると同時に、大いなる機会に恵まれた時代でもあるということです。

幸いなことに、私たちには人生の指針となるイエス・キリストの福音があるので、これから経験するであろういろいろな出来事や、環境に対する私たちの考え方の骨組みはしっかりとしています。聖典から明らかかなように、末日のこの神権時代には、世の政治的指導者が約束するような「平和」はありません。しかし教会員である私たちには個人的な平安を保つ手段があります。たとえ周りには平安がなくとも、私たちには心の内に平安を見いだす方法を与えられているのです。

今では耳慣れたものになっているかもしれませんが、年老いた私たちは真直ぐで狭い道を歩みつづけることの重要性についてよく話します。確かに同じようなことを何度も何度も繰り返し語っているのですが、それはなぜでしょうか。よく考えてみれば次のことにすぐ気づかれると思います。すなわち、真直ぐで狭い道の両側は依然として断崖であって、危険性は少しも薄れてい

ないこと、そしてその道は相変わらず険しいということです。

教会の指導者は、皆さんを教えるたびに、天父のみ前に戻るための新しくして魅力的な道を示すことができるわけではありません。道は変わらないのです。それだからこそ、同じことに関して絶えず励ましを与え、警告を繰り返さなければならぬのです。ある真理が繰り返し説かれたからといって、その重要性や真実味が薄れるということはありません。

近代の啓示をひも解くと、次のような聖句が見当たります。「神の栄光は英智なり。すなわち、光明と真理なり。」(教義と聖約93:36)「淨き知識〔は〕……その人を甚だ大いならしむ……」(教義と聖約121:42)、また次のような聖句もあります。「人は無智にして救われること不可能なり。」(教義と聖約131:6)これらの聖句は非常に誤って理解されています。多くの若人がその真の意味を理解しないままに結論を急ぎ、準備もなく道に乗り出し、道路地図も持たないまま車の流れに乗っていくのです。そしてついには失望の憂き目を味わっています。

それでは一体どのような知識に力があり、またどのような力がその知識から生まれてくるのでしょうか。この偉大な真理について分析してみましょう。正しい順序を挙げれば、神とその救いの計画につける知識、すなわち永遠の生命に至る道を示す知識が第1であって、第2が、これも非常に大切なものですが、この世のことにつける知識です。創り主御自身がこの正しい順序を定められ、その秩序を明らかにしておられます。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添え

て与えられるであろう。」(マタイ6:33)

また予言者ジョセフ・スミスを通して主は次のようにおっしゃっています。「こは、永遠の生命なり。すなわち、唯一の智恵ある真実の神と、その神の遣わしたまいしイエス・キリストを知ることなり。われは、その遣わされたる者なり。故に、汝らわが律法を受け入るべし。」(教義と聖約132:24)

さて、この現世の生涯は神に会う備えをしなければならない時期であって、これは私たちに課せられた第一の責任です。永遠にわたって霊の幕屋となる肉体をすでに持っている私たちは、自らの肉体と精神と霊とを訓練しなければなりません。ですから、私たちがこの生涯になすべき第一のことは、自らを完き者とし、肉欲を征服し、肉体を霊に従わせ、すべての弱点を克服し、他の人々を指導できるように自分を治め、必要なすべての儀式を行なうことなのです。そしてその次にくるのが、この地とそれにつけるすべてのものを従わせるために備えることなのです。

私たちはこの限られた生涯の中で神について学び、自身の行く末を自ら定めます。次に、この世の生涯から永遠にわたって、この地とその上にあるすべてのものについて学び続け、この世の知識を蓄積して神のようになる一助とします。神のようになることこそ私たちの行く末となるものです。

ペテロとヨハネは、この世の学問に乏しく、人々からは無学な者と思われていました。しかし、人生において最も重要な知識、すなわち神が生きておられ、十字架にかけられた後、復活された主が神の御子であられるという証をもっていました。彼らは永遠の生命に至る道を理解していました。この世に生を受けて、30年の間にこれらのこ

とを学んだのです。ふたりにとって昇栄とは神のようになることであり、永遠の子孫増加を伴う諸々の世界の創造を意味していました。この創造を行なうためには、彼らも幾つか化学の総合的な知識を必要とすることでしょう。ここで多くの人々が見落としていることがあります。すなわち、ペテロとヨハネについて考えてみると、霊的な物事を学んで実践するための期間はわずか2、30年しかありませんでしたが、この世の学問、つまり創造物を対象にした生理学や動物学、心理学、あるいは地質学などを学ぶにあたっては、すでに1900年もの年月がふたりに与えられているということです。現世では神とその福音について学んで儀式を行なうことが第一であって、この世のことについて学ぶのは二義的なことなのです。人々から無学な者と思われていたペテロとヨハネが昇栄を受け継ぐ者となったゆえんが、ここにあります。

非常に高度な訓練を受けた科学者で、人格的にも完成した人であれば、ひとつの世界を創造し、そこに人を住まわせることができるかもしれませんが、放縦な生活を送り、悔い改めることをせず、主を信じようとしない人たちはたとえ永遠の世界に行っても、そのような創造者には決してなれないでしょう。

この世の学問は確かに重要なものではありますが、それだけでは決して人の身と霊を救い、日の光栄の王国の扉を開き、世界を創造し、人を神のようにすることはできません。しかし、永遠の生命への道を理解している人が、第一のものを第一とし、すべての知識を道具として、あるいは僕として使うことができれば、それは最も役立つものとなるでしょう。

私は若い頃に、ミューチュアルのある女性から非常に感動的な話を聞きました。そのように感じたのは、彼女の話し方によるものと思いますが、もしかしたら会場の雰囲気によるものであったかもしれません。彼女はまず、聖典を読んで自分のものとするについて、私たちの心を非常に鼓舞する話をしました。それから理路整然と進めてきた話をそこで打ち切って、千人程もいる私たち聴衆に向かって次のように質問しました。「聖書を初めから終わりまで読み通した人は、この中に何人いらっしゃいますか。」

その時、私は14歳ぐらいであったと思います。罪悪感の混じった複雑な思いがだいに胸の内にひろがってゆきました。私はそれまで漫画や娯楽小説などけっこう多くの本を読んではいたのですが、私の良心は次のようにささやくのでした。「スペンサー・キンボール、おまえはまだあの聖なる書物を直接読んだことはない。どうしたということだ。」私は会場の前の方や両わきにいる人々をおずおずと見渡し、その聖なる書物を読んでいなかったのは私ひとりかどうか確かめようとしました。千人あまりも人の内、たった6人くらいだったでしょうが、誇らしげに手を挙げた人がいました。私はすっかり打ちのめされて、自分の椅子

ペテロとヨハネは、人生において最も重要な知識、すなわち神が生きておられ、十字架にかけられた後、復活された主が神の御子であられるという証を持っていました。

に身を沈めました。私と同じように読んでいなかった人々のことは頭にありませんでした。ただ自分自身を責める気持ちに駆られていたのです。私は肩を落として坐り込んだまま、他のだれでもないちっぽけな自分自身を責めていました。ほかの人が何をして何を考えていようと関係ありませんでした。その後の説教は全く私の耳に届きませんでした。すでにその説教は十分に効果を上げていたのです。集会が終わると私は出口の大きな二重扉を目指して飛び出し、教会から2ブロック程東にある自分の家へ一目散に走って行きました。私は悔しくて歯ぎしりをし、何度もつぶやいて言いました。「やるぞ、やるぞ、きっとやってみせろぞ！」

私は家の勝手口の方から入り、灯油ランプの備えてある台所のたなへ行きました。新しい切り口の灯心に油の十分に入っているものを選び、階段を登って屋根裏にある自分の部屋に行きました。さっそくその場で私は聖書を開け、創世記の第1章第1節から読み始めました。アダムとイヴ、カインとアベル、エノクとノア、そして洪水の物語からアブラハムのところまで夜中になるまで読みふけりました。

もちろん、神につける事柄を学ぶということは、こうしたことよりはるかに難しい部分を含んでいるはずで、すなわち、完全な者となるということです。姦淫の罪を犯さないというだけではなく、そのような忌まわしい罪に誘うようなあらゆる行ないや思いも避けなければなりません。復しゅう心や敵がい心を抱かないというだけではなく、「ほかの頬をも向け」「二マイル行き」「下着をも上着をも与え」(マタイ5:39-41参照)なければなりません。友人を

愛するだけではなく、敵を愛し、皆さんに不正を行なう人々にさえも愛を示さなければなりません。彼らのために祈り、真心から愛さなければならぬのです。これが完成への道なのです。盗みや強盗を働かないというだけではなく、都合のよい理屈をつければいくらでも不正直がまかり通るような分野でも、思いと行ないを正しくしなければなりません。すなわち誇大な報告書を作成する、時間を守らない、金銭や仕事をごまかす、その他あらゆるいかがわしい、あるいは不審な行為に身をゆだねる、このようなことをすべて避けなければならぬのです。また、木や石や金属でできたものを拝まないというだけでなく、生けるまことの神を積極的に礼拝しなければなりません。これが真直ぐで狭い道を歩むということなのです。

さて、私はひとつの提案をしたいと思います。それは、同じ誘惑に遭うたびに、自分が行なうことを決めなくてもよいように、自己を訓練するということです。決心は一度だけすればよいのです。

同じ誘惑に繰り返し苦しめられた経験がないというのは、何と素晴らしい祝福でしょうか。そのような苦しみとは時間の浪費であるばかりでなく、非常に危険なものなのです。

愛する若人の皆さん、人生において達成しようとしている積極的な目標についても、同じことが言えます。伝道に出るとか、ふさわしい生活をして神殿で結婚するといったことは、一度決心すればよいのです。そうすれば、こうした目標に伴うその他の決心は、すべて簡単に行なうことができます。ところがそうせずに、ことあるごとに再考を重ねるのは実に危険なことです。そのた

びにあいまいな表現を用いるようになれば誤りに陥るかもしれません。末日聖徒には行なうべきことと、その他の行なってはならないことがあります。早い時期に正しい決心をするならば、それだけ皆さんにとって利益となるでしょう。

私は幼い頃から、お茶、コーヒー、タバコなどを口にしてはいけないという知恵の言葉の話を聞かされて育ちました。日曜学校や初等協会に出席するたびに、ほとんど毎回のように他の子供たちと一緒に元気一杯に歌ったものです。

みめうるわしく 長く生きんと  
コーヒー、たばこ、茶を遠ざけ、  
酒は飲まずに、少しの肉で  
強く智恵もてのびんとす

(子供の歌、B-24「神の聖徒の」2番)

私たちはこの歌を何度も何度も繰り返して歌いました。やがてこの歌は私の口をついて出るようになり、私の愛唱歌のひとつとなりました。そして、私の人生設計に影響をおよぼしたのです。私は時々、衆目の尊敬を受けた立派な人から、この歌のように禁じられたものを決してとったことがない、といった話を聞きました。そこで私も決心しました。予言者たちが警告しているこれらのものを決して用いまいと心に決めたのです。この決心は固く揺るぎないものでした。私はこの決心を翻えそうと思ったことも、実際に翻してしまったこともありません。

1937年に、私と妻はヨーロッパ旅行へ出かけました。フランスで私はある名だたるホテルで開かれた、国際ロータリーの定期総会の晩餐会ばんさんかいに出席しました。広々としたその会場には何百人もの人々が集まってい

ます。大勢のウェイターがテーブルの周りでせわしげに立ち働いています。それぞれの席には、たくさんの銀製の食器やリンネルのナプキン、あるいは美しい食卓皿が並べてあって、そのわきにはワイングラスが7個置かれています。だれも私を見ていません。その時、秘ひそかな誘惑が私に忍び寄ってきました。——ワインを飲んでみたらどうだ、ほんの少しすすってみるのならよいだろう。だれも気づきはしない。私は非常に大きな誘惑に駆られました。「飲んでみようか、それともよそうか。」

その時、私を思いとどまらせるものがありました。——「しかし、私は少年の頃、禁じられたこれらのものに決して手を出すまいと決心したのだ。すでに30年以上もこの決心を断固として守り続けてきた。今さらこの記録に背くわけにはいかない。」

選り抜きの高貴な霊を持つ若人の皆さん、このことを忘れてはいけません。「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」(アルマ41:10) 不正を行なう人々は幸福を装い、他の人々をそそのかして同じような生き方に誘い込もうとするかもしれません。皆さんもおわかりのように、哀れな人々は仲間を求めるものだからです。しかし、幸福な罪人などはどこを捜してもいないのです。にもかかわらず善良な人々が彼らをうらやむとすれば、それは自らに欠陥があることを示しています。

少し観察しただけでは、不正を働く人々のほうが、いわゆるうまくやっているように感じるかもしれませんが、しばらくの間は確かにその通りであるかもしれませんが。しかし、はなはだしい罪は人に虚無感きよむかんをもたらします。そうになると悪人は、自信を取り戻すためにさらに同じような罪を重ね、

同じ誘惑に繰り返し苦しめられた経験がないというのは、何と素晴らしい祝福でしょうか。

その空虚な気持ちを満たそうとするように見受けられます。絶望に満ちた生活を観察してみると、そこには罪が存在しています。私たちはそのような人々を気の毒に思うことはあるかもしれませんが、彼らをうらやむとすれば、それは誤りであり、私たちが未熟な証拠なのです。

私たちは、昔の族長や予言者たちについて学び、彼らが圧力や誘惑、迫害の中で示した忠実さを知ることによって、若き日の決意を強めることができます。聖典全体の中に、人間の持つほとんどの弱点や強さが明らかにされており、それに対する報いや罪も記録されています。そのような書物を読むことによって人生を正しく生きingことを学べなかった人は、確実に道に迷ってしまうことでしょう。主は次のようにおっしゃっています。「聖典を調べなさい。あなたがたは、聖典の中に永遠の生命があると思って調べているが、聖典は、わたしについてあかしをするものである。」(欽定訳ヨハネ 5 : 39)

私たちは主御自身の生涯の中に、自らの生活の中で伸ばすべきあらゆる良い資質を見いだすのです。

どこでもいいですから、聖典を開けてみて下さい。主が御自分の教会を見捨てられるような箇所を見つけることができるで

しょうか。主が御自分に従ってくる人々や隣人、友人、同胞に対して不誠実な態度をとられたことを示す聖句があるのでしょうか。主は忠実で偽りのない御方であられたでしょうか。善いものや価値あるもので主が施されなかったものがあるのでしょうか。これこそ私たちが皆さんにお尋ねすることであり、主がすべての夫に、すべての妻に、すべての少女に、そしてすべての少年に尋ねておられることなのです。

さて、人生設計に役立つもうひとつの助言をしましょう。それは、皆さんの世代に課せられた特別な責任を果たすために、利己心を避けるということです。多くの人々が持っていて、完全に克服すべき性向のひとつに、利己心があります。皆さんは、若くて順応性があり、利己心を捨てることも私欲におぼれることも可能です。そのような年代にある皆さんが今行なうことは、すべて今後の人生において、さらには来るべき永遠の世において、変わることはない重大な影響を与えるものとなるのです。もし、利己心を克服することができれば、皆さんはとても素晴らしい妻となり夫となり、また素晴らしい母親となり父親となるでしょう。そして、やがて生まれてくる皆さんの子供たちも、皆さんが利己心を克服することによってもたらされる祝福にあずかるのです。

あらゆる点においてそうであるように、この点についても私たちはカルバリで十字架におかかりになった救い主に模範を見いだすことができます。主は自ら進んで価値ある尊い業をなされたのです。それは、イエス御自身がすでに得ておられた不死不滅の賜を他の人々にもたやすものでした。主の生涯は献身の最高の模範でした。

もし、利己心を克服することができれば、皆さんはとても素晴らしい妻となり夫となるでしょう。

皆さんは、ニーファイ第三書の中で、復活されたイエスがアメリカ大陸を訪問された場面を覚えているでしょう。主は子供たちを祝福して、二度にわたって涙を流され、次のようにおっしゃいました。「見よ、今わが喜びは満ち溢れたり。」(IIIニーファイ17:20)

真の幸福とは、神の王国を築くというような正しい目標、すなわち私たち個人の欲得を越えた大きな目標に献身することによってのみもたらされます。快樂は自己中心的なものに陥りがちですが、真の幸福には常に自分以外の人が含まれているものです。

フランスの宗教史家アーネスト・ルナンは次のように語っています。「万事は天命を受けた人々に味方する。彼らはいわば天からの抑えきれない衝動と指示とによって榮譽に輝くのである。」(*The Life of Jesus* 「イエス伝」)

私の友である若人の皆さん、皆さんはこれまでの同年代の末日聖徒よりもはるかによく聖典に通じている若き末日聖徒になるでしょう。皆さんは生涯かけて聖典を学ぶのです。皆さんは、これまでのどの世代よりもさらに献身的に伝道活動を(専任宣教師として働く前と後を含めて)行なう青年になるでしょう。全体的に言って、皆さん

は以前の世代よりもさらに、福音を宣べ伝えることの重要性を理解できるでありましょう。

皆さんは、イエス・キリストの福音を恥とはせず、また同様に末日聖徒イエス・キリスト教会をも恥とはしないででしょう。

若い末日聖徒である皆さんの心が、いまだかつてない程の規模で先祖に向けられる様子が目に見えます。皆さんは糸図探求と神殿参入に対する生来の関心を育ていき、それは皆さんの両親や祖父母が皆さんと同じ年頃に抱いていた関心をはるかにしのぐものとなるでしょう。

皆さんは、教会の若い男性や若い女性のプログラム、日曜学校、扶助協会、初等協会、あるいは神権定員会などで得た指導者としての経験を十分に生かすことができるでしょう。そして、世の中の様々な分野で、高潔で有能な奉仕のできる若い青年男女として、思慮深い人々からの需要に<sup>あ</sup>応えるようになるでしょう。そのような若い末日聖徒は、自分の持つ技術、能力、そして高潔な人柄を発揮すると同時に、自らの信仰をも実践してゆくでしょう。

若い末日聖徒の皆さんは、以前の世代に比較して、同年齢ではるかに進歩した証をもっていると思います。

愛する若人の皆さん、このことを忘れないうで下さい。この世の王国が揺れ動く時にも、神の王国は確固として揺るぎなく立つのです。また、この世の智者たちの影響力がその人の死によって消え失せる時にも、忠実にまた勇敢にすべての義務を果たした人々の栄光と進歩は、至高者の權威と力のうちに脈々と生き続けます。このほかに道はないのです。

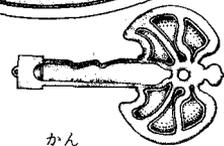
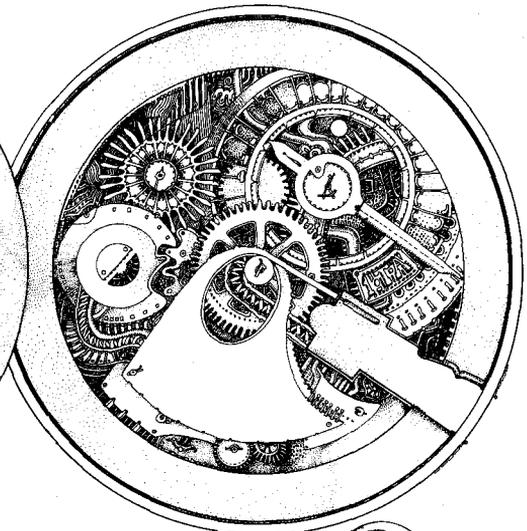
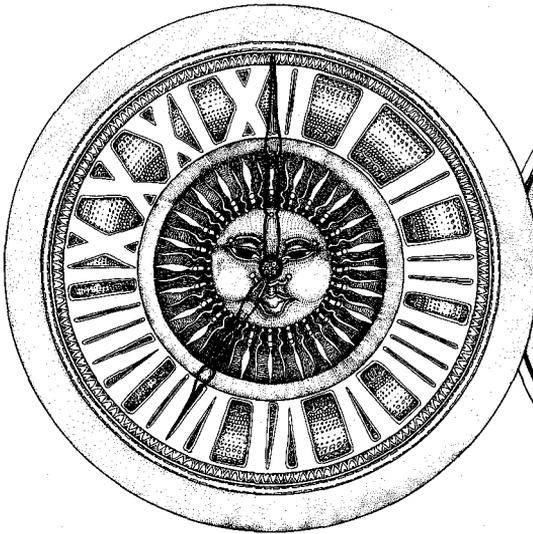


ちい とも  
**小さなお友だちへ**



……汝<sup>なんじ</sup>らは時<sup>とき</sup>を空<sup>むな</sup>しく過<sup>すご</sup>すことな  
 れ。また、人<sup>ひと</sup>々に知<sup>し</sup>られざらんがた  
 めに汝<sup>なんじ</sup>らの才<sup>さい</sup>能<sup>のう</sup>をか<sup>く</sup>すべからず。

——教<sup>きょう</sup>義<sup>ぎ</sup>と聖<sup>せい</sup>約<sup>やく</sup>60:13



てん とう じ かん  
**天のお父さまの時間**

チャールズ・A・ディディエ



子どもの時期は、自分のまわりの世界のことに、いろいろな発見をするすばらしい時期です。また、これから出会うたくさんのチャレンジに備えるために、この世界を治める正しい原則を、お父さんやお母さんからおそわる時期でもあります。

救い主から与えられた最も大切なチャレンジのひとつに、ほかの人を救い主のみもとに連れていくことがあります。私たちの愛する予言者、スペンサー・W・キンボール大管長は、すべての男の子に、りっぱな宣教師になれるよう準備しなさいとおっしゃっています。大ぜいの男の子や女の子が、どうすれば主イエス・キリストの宣教師になれるのかと考えています。お父さんやお母さん、神権指導者たちも、そのことについていろいろと教えてくれるでしょう。でも、最後には自分で答えを出さなければなりません。それは、あなたの今の行ないが、習慣になっていくからです。良い行ないをしてい

ば良い習慣が身につく、悪い行ないをしていると悪い習慣が身につきます。そして、その習慣がみなひとつとなって人格が決まります。あなたの人格は、あなたが主の教えにしたがうかどうかによって、決まってくるのです。

キリストのような人格を築くための大切な原則を、教えてあげましょう。この原則にしたがえば、あなたは主のいましめにしたがうことができ、宣教師になるのに必要な、良い習慣を身につけることができるでしょう。この原則は、教義と聖約60章13節の中に書かれています。この聖句を思い出すには、心の中で自ざまし時計を思い浮かべるとよいでしょう。

もし、自ざまし時計が、時間通りに鳴らなかったり、こわれていたりしたらどうなるでしょうか。そうですね。学校やバスや、集会におくれるかもしれません。そしてそのために、すまないという気持ちになったり、しょんぼりしたりすることがあるかもしれません





ん。自ざまし時計は、しなければなら  
ないことと、その時簡を、思い出させ  
てくれます。また、主のために働く時  
は特にそうですが、時簡をじょうずに  
使うことも思い出させてくれます。

自ざまし時計は、ぜんまいで動きま  
ず。ベルを聞いたたら、それはいつも、  
ぜんまいのおかげだということを思い  
出して下さい。ぜんまいがあるので、  
あなたはベッドからとびおきることが  
できるのです。でも、ベルを鳴らすた  
めには、ぜんまいをまくねじが必要で  
す。そしてあなたはいつもそのねじを  
まかなければなりません。ねじをまき  
わすれると、針も動かないし、ベルも  
鳴りません。

おいのりをするには、自ざまし時  
計のねじをまくことと、似ているよう  
な気がします。おいのりは、天のお父  
さまとお話するためのねじです。ねじ  
をまいていなかったら、自ざまし時計  
のベルがならないのと同じように、お  
いのりというねじをまかなかったら、

神さまと心を合わせることはできませ  
ん。でもおいのりをして、ねじをまけ  
ば自分が神さまの子供であるというこ  
と、また神さまがおいのりを聞いて下さ  
り、従順になりたいという私たちの  
望みにも心をかけておられることを、  
思いおこすことができます。

私は、自ざまし時計にとっても感謝し  
ています。それは、今何時かを教えて  
くれるだけではなく、おいのりについ  
て考えさせてくれるからです。また、  
時簡をおだにせず、自分の才能を伸  
ばし、それを他の人のために使わなけ  
ればならないことも、思い出させてく  
れます。これは天のお父さまへの愛を  
あらわす方法のひとつです。

私たちは神の子です。私たちの時簡  
は、私たちが天のお父さまのために働  
くことができるよう、天のお父さまが  
与えて下さった、天のお父さまの時簡  
なのです。





# おもちゃばこ



さあ さがそう



おうむ、とかげ、かたつむり、なまけもの、みつばち、ありくい、ちょうちょ、はちどり、へび、かえる、やじり、がどこかにかくれています。

ハルーンは、一本だけぼつんと立っているアカシアの木の下に、こしをおろし、ほんやりと遠くをながめていました。長いえだを、かさのようにのびしたアカシアの木かげの一步外は、アフリカのもえるような太陽が、じりじりと、てりつけていました。

ソマリアには、家ちくのために草や水を追って、草原の中をあちこちと移動してくらしている、遊牧民と呼ばれる人たちがいます。ハルーンは自分の家をはなれて、この遊牧民とくらしていました。

遊牧民たちの家は、草で作ったそのままのものでした。「父さん、今ごろ荷してるかな。家にいたら、海からふいてくるすずしい嵐の中で、母さんのおいしいごちそうを、食べていられたんだ。母がなつかしいな。ここは、家というよりも、小屋といったほうがびったりだ。中に入るときは、せをかがめ、ねるときまで、ぎゅうぎゅうづめだ。」

どこを向いても、はるか遠くに地平線が見えるだけです。近くに背の低い木が荷本か生えていて、そのまわりに

## ソマリアの草原で

メアリー・ゲーマン



▼らくだのせに荷物を積もうとしている町から来た男の子

は、やぎたちが集まっていた。もうちょっとはなれた所には、何頭ものらくだがむれをつかっていました。

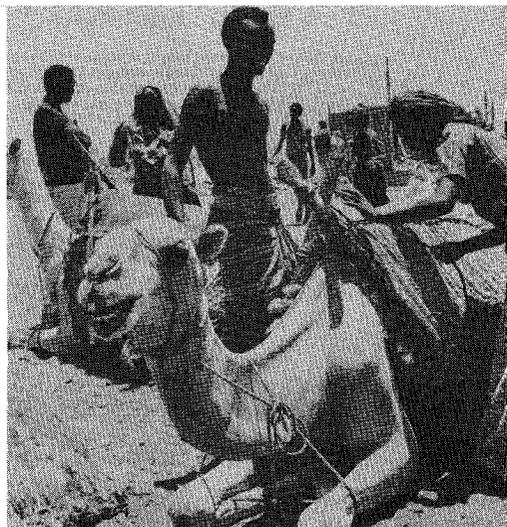
ハルーンがなつかしい家のことを考えていたとき、ハルーンの頭の中に、シアド・バーレ大統領のことがうかんできました。ソマリアでは、新しく決められた文字を、みんなが読み書きできるようにしようという運動が、始められていました。大統領はその運動に協力して、ソマリアの各地へ行くことになっていた学生たちに、こう言ったのです。「知っている者は教え、知らない者は学ぼう。」

ハルーンも、始めは遊牧民たちに、読み書きを教えたいと、はりきっていたのです。

この国には、もともとソマリア語という話しことばがあったのですが、それを書き表わすための文字はありませんでした。ところが1972年に、ソマリア語のための文字が定められたのです。

それでもハルーンにとっては、ソマリア語の読み書きは、ちょっとかっpegちがいました。前は、本を読むときはいつも外国語のものばかりだったからです。

ハルーンは、まだ4さいのときから学校に行き始め、コーランというイスラム教の聖典を勉強しました。教室で、みんなといっしょに、アラビア語でコーランのことばに節をつけて読まされ



ましたが、意味はさっぱりわかりませんでした。

英語は、7さいのときから習い始めました。

いろいろな人が、ソマリア語を書き表わす文字を作ろうとしましたが、うまくいかず、ようやくそれができたのは1972年になってからです。

ハルーンは、英語と同じ文字で、ソマリア語を書くようになるというニュースを知らされたときの、あの胸の高鳴りを忘れることができませんでした。その発表を伝えるために、飛行機から町中にチラシがまかれました。

発表があつてから3カ月たったとき、政府の書記官として働いていたお父さんが、「父さん、来週新しい文字の読み書きのしけんがあるんだ。不都合なく

にでもなったら大へんだよ」とハルーンに言いました。

ある日、ハルーンが3人の友だちと、小さな食堂にいたときのことで、ジャマという名のなかまのひとりが、新聞のようなものを持って、かけこんできました。それは新しい文字がいんさつされた、初めての新聞でした。

「見ろよ、これ！」ジャマは大きな声でそう言うと、とくいそうに、その新聞の名前にあたる文字を読みました。

それから人は、かじりつくようにして、その新聞を読み始めました。

ラジオからも、新しい文字の読み書きを教える番組が、毎日流れ、町のあちこちで、読み書きの教室が開かれました。

1974年8月、この新しい文字は、奥地の遊牧民たちにも、広められることになりました。ほとんどの学校は、1年間閉じられ、14さい以上の学生は、遊牧民たちに教えるために、奥地へ送られたのです。

何千人もの学生が、ソマリアの各地に散っていきました。ハルーンも、そのひとりです。役所に、毛布や教えるときに使う道具などを受けとりに行ったとき、役所の人は、「神の祝福があるように」と言って、ハルーンを、見送ってくれました。

ハルーンには、先生としてやっていく自信が、十分にあったのですが、そ

の部族のしゅう長は、ラクダのことを何も知らないわかものから教わることなど何もないと考えていました。そんなわけで、読み書きの勉強会も、子供や女の人たちが、たまにやってくるだけでした。

ハルーンは、町の自分の家に帰りがくて、しかたがありませんでした。それに、ここではだれも、自分を相手にしてくれません。

全く、やる気をなくしていた、そんなとき、学校で友だちだった、オスマンに、会うことができました。オスマンは、ほかの部族の人たちと、旅の中そこに来たのです。オスマンは、文字を教えることにも、とても熱心でしたが、遊牧民たちからも一生けんめいに学んでいました。オスマンは、らくだのはらをなでながら、楽しそうに言いました。「今度の移動では、らくだのせ中に、にもつをつむのも手つだつたんだ。それまでは、らくだなんて、さわったこともなかったけれどね。きみは、らくだのこと、なにか知ってる？にもつをのせてから、立てって命令したら、本当に、その通りに、言うことを聞くんだ。」

オスマンが、行ってしまったあとで、ハルーンは考えました。「ほくは、大統領が言った、ふたつのことのうち、ひとつの方にばかり、気をとられていたみたいだ。教えようという気ばかり

で、この人たちが学ぼうという気持ち  
ちが、ちつともなかったんだ。」そして  
口の中で、「知っている者は教え、知  
らない者は学ぼう」という大統領のこ  
とばを、しずかに、くり返してみました。

その夜、部族の人たちは、たき火を  
かこんで、しゅう長から昔のソマリヤ  
の英雄たちの物語を聞いていました。  
ハルーンも聞いていましたが、それは  
とても、おもしろい話でした。「この話  
は、書きとめておかないと、いけない」  
と、ハルーンは思いました。しかし、  
その次の日は、部族が移動を、始めな  
ければならなかったので、勉強会の時  
間もなければ、きのうの夜の話を書く  
ひまも、ありませんでした。

ハルーンは、部族の人たちの手つだ  
いを、進んでしました。そして、新し  
い場所に着いたころには、すっかりみ  
んなと、なかよくなっていました。た  
だ熱が出てきて、気分が悪くなったの  
ですが、それでも、よわねは、はきま  
せませんでした。しゅう長のアブジは、ハ  
ルーンの病気のことを聞くと、とても  
心配し、部族のわかものに、薬草を取  
りにやらせました。しゅう長は、ハル  
ーンに言いました。「おとつあんの  
所に、帰ったほうがいいぞ。町のもの  
には、きつすぎるんだよ、ここの生活  
は。」

でもハルーンは、読み書きを教えた

いというだけでなく、部族の人たちか  
ら学びたいという気持ちがあり、帰  
つもりは、ありませんでした。病気が  
なおった後も、ハルーンは、一生けん  
めい、部族の人たちの生活のしかたを、  
知ろうとしました。しゅう長は、ハル  
ーンのそのすがたを見て、何人かの者  
に、読み書きの勉強会に出るようと、  
命令しました。

そして、アカシアの大きな木の下に、  
たくさんの子供たちが集まるようにな  
りました。

町の学校とは大ちがいです。黒ばん  
は、木にぶらさげるだけです。その上、  
ほこりっほい空気にまじって、らくだ  
の、ものすごいにおいがただよって  
くるのです。

中には、ほかの生徒に教えるくらい



▲読み書きを学ぶ人たち

覚えのよい生徒もいました。小さな子供たちは、やぎのむれの番をしながら、教えられた文字の読み方をくり返したり、地面の上に字を書いたりして、練習しました。

ある満月の夜、ハルーンは、しゅう長が話した物語を、みんなの前で聞かせました。何週間か前から書きとめておいたものです。聞いていた人たちは、ハルーンの話に、むちゅうになりました。そして、文字があれば、自分たちの部族に伝わる話を、人に教えることも、できるのだということに、気づき始めたのです。

ハルーンの話が終わったとき、それまで、じつと何かを考えていたしゅう長が、言いました。「ハルーン、こいつは便利だ。むかしから伝わる話を、文字にしとけば、子供たちも忘れないだろう。わしも習うぞ。」

しゅう長は、熱心に勉強しました。そのおかげで、ほかの人たちも、もつと顔を見せるようになりました。

ハルーンたち何千人もの学生が、遊牧民の中で、8か月間の責任を果たして帰ってきたとき、首都のモガティシユでは、大ぜいの人々が道路に集まって、学生たちをおかえ、文字を広める運動が、一歩前進したことを祝いました。

学校も、また始まり、ハルーンたちは学生生活に、もどりました。でも、

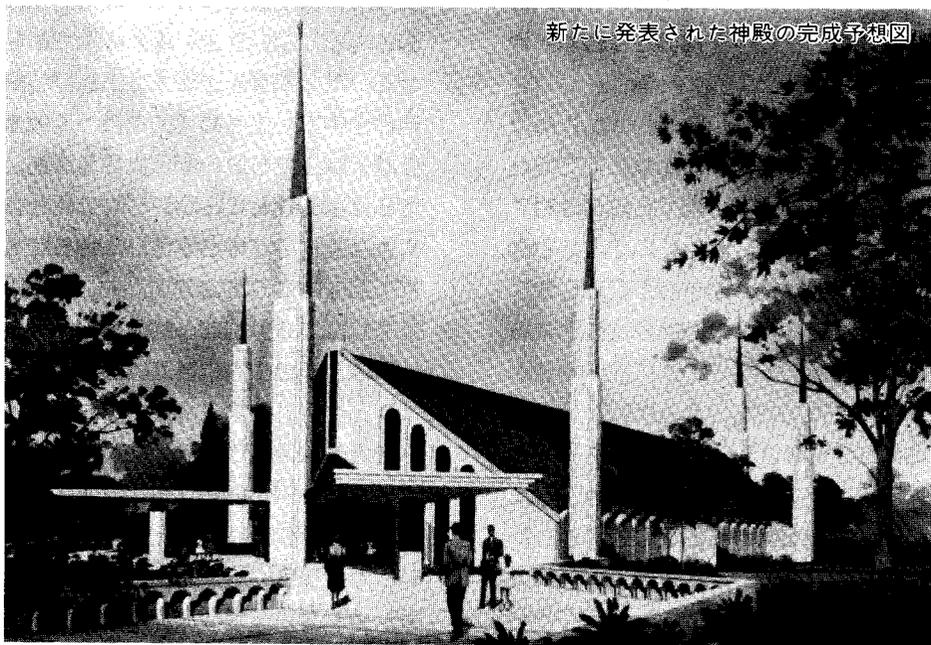
前とはちよつとちがうところがありました。というのは、学生たちは、遊牧民たちとの生活によって、自分たちの国の問題についてよく考えるようになっていたのです。遊牧民は、きびしい自然の中でも生きぬく力を持っていますが、学生たちは、その生活技術を、さらによく理解し、ソマリヤの伝うてきな文化のすばらしさに、さらに大きく目を開かれたのです。

それから6か月たったある日、ハルーンは、町の中を歩いていとき、とつぜん何かものすごいにおいを感じました。それは、らくだのにおいでした。なつかしい思い出が、次から次へとうかんできました。そのとき、らくだのむれが押し合いへし合い、通りを連れてくるのが見えました。ハルーンは、そのむれを連れてくる男の人を見ると、近づいて話しかけました。その人は、しゅう長アブジヤ、その部族をよく知っていました。

その人はハルーンに、長い日数をかけて運ばれてきた一通の手紙をわたしました。それは、しゅう長アブジヤが、自分で書いた手紙でした。中には、ハルーンへのお礼のことばが書いてありました。

アブジヤも、大統領のあのことばにならっていると知って、ハルーンへの喜びでいっぱいになりました。「知っている者は教え、知らない者は学ぼう。」

新たに発表された神殿の完成予想図



## 新たに4つの神殿

大管長会は、3月31日付で新たに4つの神殿を建設する計画を発表した。場所は、南米エクアドルのグアヤキル、台湾の台北、米国アイダホ州のボイシ、コロラド州のデンバーである。これらは3年以内に完成の予定。現在使用されている19の神殿に今回発表されたものと建設中のものを加えると、神殿総数は41になる。

## ポーランド語とヘブライ語の モルモン経、出版される

このたび、新たにポーランド語とヘブラ

イ語のモルモン経が翻訳、出版された。教会翻訳部新開発言語部門 (*Emerging Language*) 担当スーパーバイザーのローウェル・ビショップ兄弟によると、モルモン経は、今回の2カ国語を加えて51の言語に全訳または抄訳されたことになる。なお、このほかに30カ国語の翻訳が現在進められている。

ポーランド語への翻訳は、1名の専任翻訳者と8名の協力者により7年の歳月を費やして完成した。初版の3,000部は、シカゴをはじめ合衆国内のポーランド語を母国語とする人々に対し、宣教師がレッスンを行なう時に用いられる。ポーランド語はプロボの宣教師訓練センター (MTC) でも、外国語のひとつに取り上げられている。

このほか最近出版された言語には、アイスランド語、ルーマニア語、アラビア語、ナバホ語がある。

## 専任宣教師(独身の長老)の 伝道期間が18カ月に短縮

4月に開かれた総大会において、独身男性専任宣教師の伝道期間が、24カ月から18カ月に短縮されることが発表された。この発表は、大管長会、十二使徒定員会を代表して、ヒンクレー副管長により行なわれた。

「伝道費用が高騰し、多くの家族が経済的に大きな圧迫を受けている」とヒンクレー副管長は述べ、また、「学業や仕事、兵役を2年中断することに対して規制を加える地域が多くあるため、伝道期間の短縮によってそれらの調整がさらに融通のきくものとなる」と語っている。「この期間短縮の実施により、これまで問題のあった多くの若者が伝道に行くことが可能となり、さらに多くの人々に伝道に携わる機会を与えることになろう」と続けてヒンクレー副管長は述べた。

なお、現在伝道中の宣教師は、以下の方針に従って解任される。

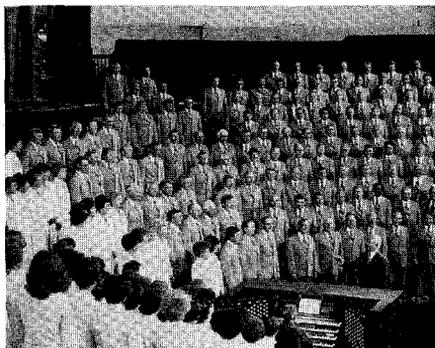
1. すでに12カ月以上伝道している宣教師は、解任の時期を伝道部長と個別に面接して決める。満期の24カ月間伝道したいと希望する宣教師には、それが許可される。18カ月から24カ月の間に解任されたいと望む宣教師については、本人の計画と伝道部の運営を考慮し、最も適した期日に解任される。

2. その他の宣教師については、18カ月の伝道期間を完了した時点で解任される。姉妹宣教師の18カ月間、また夫婦宣教師がその状況に応じて6カ月、12カ月、18カ月とそれぞれ期間が決められることなどは、現状のまま継続される。

## モルモン・タバナクル合唱団、 ヨーロッパ演奏旅行へ

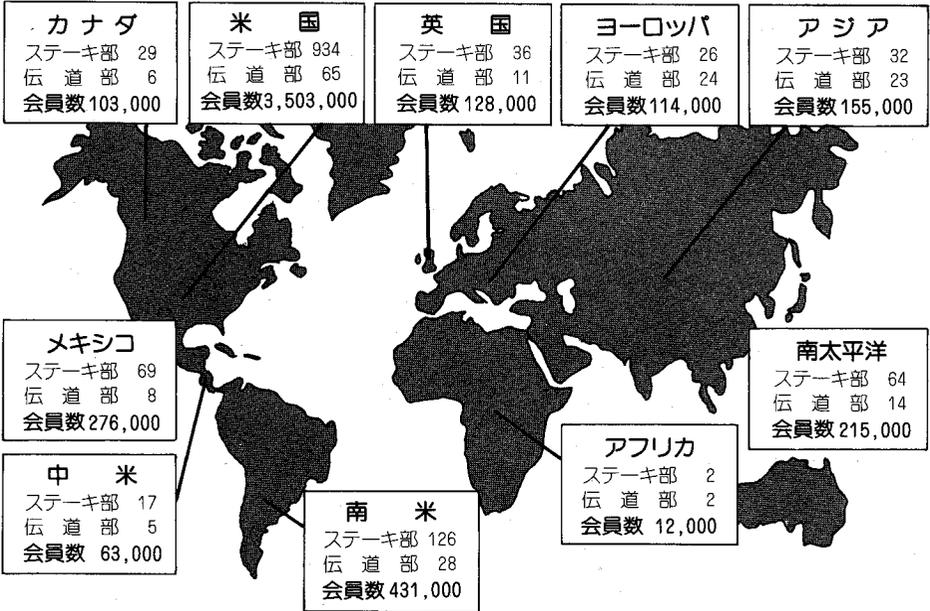
モルモン・タバナクル合唱団は、この6月にヨーロッパの各都市において、第12回海外演奏旅行を行なう。

団長のオークレー・S・エバンズ兄弟によれば、一行はノルウェーのベルゲン、オスロ、スウェーデンのストックホルム、フィンランドのヘルシンキ、デンマークのコペンハーゲン、アールボルグ、オランダのロッテルダム、そして最終公演地ロンドンの8都市で延べ10回の公演が予定されている。325名の合唱団員を始めとして、伴侶やスタッフ、随行員を含めた総勢550名が2機のチャーター機で旅行することになっている。



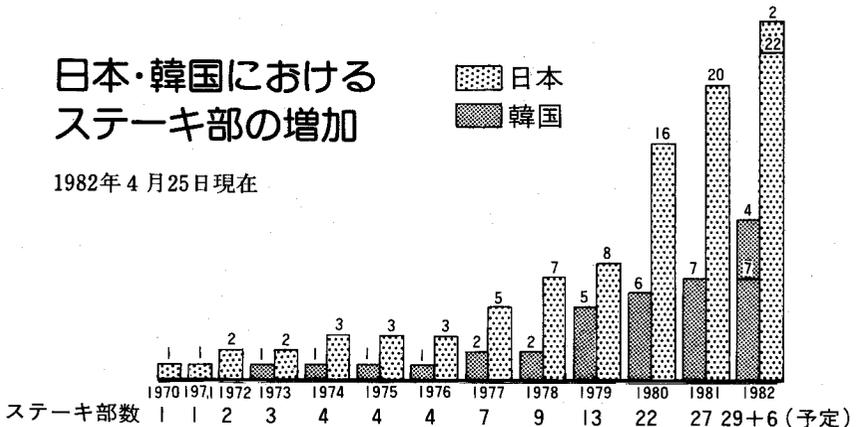
# 発展する教会

全世界の教会員数 5,000,000人  
教会員数(概算)とユニット数 1982年4月



## 日本・韓国におけるステーク部の増加

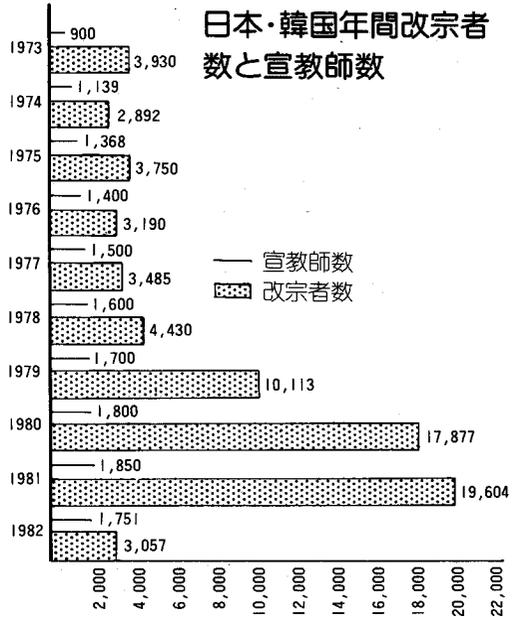
1982年4月25日現在



# 日本の伝道81年の伸展と教会員の増加

1901 ヒーパー・J・グラント長老により 伝道開始  
 1902 3  
 1905 17  
 1910 41  
 1911 51  
 1912 51  
 1913 57  
 1918 105  
 1920 127  
 1924 政情不安のため日本伝道部閉鎖

1948 日本伝道部再開  
 1949 211  
 1950 433  
 1951 709  
 1952 946  
 1953 1,117  
 1954 1,209 北部極東伝道部に改称  
 1955 記録なし  
 1956 1,315  
 1957 1,811  
 1958 2,341  
 1959 2,783  
 1960 4,157  
 1961 5,203  
 1962 5,976  
 1963 7,695  
 1964 8,599  
 1965 9,012  
 1966 9,484  
 1967 10,110  
 1968 11,487 日本伝道部と日本沖縄伝道部に分割  
 1969 12,485  
 1970 14,890 日本沖縄伝道部分割(日本西部伝道部と日本中央伝道部), 日本東部伝道部新設  
 1971 13,010  
 1972 19,902  
 1973 22,653 日本名古屋伝道部新設, 日本西部伝道部が日本福岡伝道部に改称  
 1974 24,840 日本東部伝道部分割(日本札幌伝道部と日本仙台伝道部), 日本中央伝道部が日本神戸伝道部に改称, 日本伝道部が日本東京伝道部に改称  
 1975 27,516  
 1976 29,374 日本岡山伝道部新設  
 1977 31,948  
 1978 34,969 日本東京伝道部分割(日本東京北伝道部と日本東京南伝道部)  
 1979 45,958  
 1980 52,576 日本大阪伝道部新設  
 1981 69,809  
 1982 71,551



3月末現在の教会員数  
 日本 71,551人  
 韓国 29,689人

どうぞ、よろしく！

5人の  
新伝道部長を  
ご紹介します



吉沢敏朗，ミドリ  
伝道部長夫妻

この6月に伝道部長としての3年の任期を終える5人（堀田徹伝道部長＝日本札幌伝道部，マイケル・A・ロバーツ伝道部長＝日本東京北伝道部，相良健一伝道部長＝日本名古屋伝道部，岡本亮伝道部長＝日本岡山伝道部，ロイ・I・津谷伝道部長＝日本福岡伝道部）に代わる新しい5人の伝道部長が大管長会によって発表された。7月1日から以下の新伝道部長が着任することになる。

吉沢伝道部長（60歳）夫妻は、結婚2年後の1953年6月7日にそろって改宗した。吉沢部長は伝道部長に召されるまで、支部長，地方部長，副伝道部長，そして福岡ステーキ部のステーキ部長を歴任した。

また吉沢部長は九州帝国大学（現九州大学）を卒業。伝道部長の召しを受けるまで、九州電気建設工事株式会社の技術開発担当部長を務めていた。

ミドリ姉妹はハワイのマウイ島出身である。彼女も支部，地方部，伝道部の扶助協会会長や副会長を歴任しており，福岡ワード部の日曜学校教師として働いてきた。3人の子供に恵まれている。

任地は日本岡山伝道部。



タカシ・C・清水, セイコ・G・  
清水伝道部長夫妻

清水伝道部長（57歳）は1945年に改宗。カリフォルニア大学を卒業。監督、副監督、高等評議員、ステーキ部の若い男性副会長など多くの責任を果たし、この度の召しを受けるまではカリフォルニア州のパームデザートワード部で、伝道主任として働いていた。また、第二次大戦中に軍役に服した経験を持ち、この10年間は造園業を営んできた。

セイコ姉妹はユタ州ローガンの出身。これまでにステーキ部およびワード部の扶助協会の役員、日曜学校の教師、ワード部の図書委員などたくさんの責任を果たしてきたが、特筆すべきは重度の肢体不自由児のための教育施設で看護に当たっていたことである。4人の子供に恵まれている。

任地は日本福岡伝道部。



ジョー・N・池田, アイリーン・ツツエ  
池田伝道部長夫妻

1958—1961年の間、日本で専任宣教師として働いた池田伝道部長（43歳）は、今回が二度目の日本における召しとなる。また支部長、副監督を歴任しており、伝道部長の召しを受けるまでは、ソルトレーク・ローズパークステーキ部で高等評議員の責任を受けていた。仕事は、化学関係の研究。

アイリーン姉妹は、ハワイの生まれである。初等協会、若い女性、日曜学校の教師として働いた後、ワード部の扶助協会副会長となった。3人の子供がいる。

任地は名古屋伝道部。



## デビッド・H・保喜, フミコ・ 保喜伝道部長夫妻

保喜伝道部長（49歳）は、1956年5月6日にテキサス州ウェスラコで改宗。それ以来、支部書記、監督を歴任し、今回伝道部長として召されるまでは、テキサス州のマックアレンステーク部で高等評議員の責任を果たしてきた。と同時に農業経営者として26年間、冬野菜の生産に励んできた。

また保喜伝道部長は、死別した前夫人との間に6人、現在のフミコ姉妹との間に3人の合計9人の子供の父親でもある。

フミコ姉妹は、福岡の出身であり、ステーク部のホームメイキングのリーダーとして活躍し、またワード部の図書委員と扶助協会の教師を兼任していた。

任地は日本札幌伝道部。



## ラリー・F・オグデン, ジュディス・ K・オグデン伝道部長夫妻

オグデン伝道部長（40歳）はユタ州オグデンの出身。ブリガム・ヤング大学を卒業後、ユタ大学博士課程において法律学を専攻し、その後弁護士となった。

これまでに、ワード部書記、日曜学校教師、神権定員会の教師、そして二度にわたる監督の召しを歴任。1961—1964年には、専任宣教師として日本で伝道した経験を持っている。また、伝道部長に召されるまでは、ウィットティア・カリフォルニア・ステーク部でセミナリーの教師としての責任にあった。

ジュディス姉妹はカリフォルニア出身。若い女性会長、若い女性および扶助協会の教師などの責任を果たしてきた。子供は4人。任地は日本東京北伝道部。



▲第34期生21名の専任宣教師

日本人宣教師の数に増加の兆しが見られ、3月には今までの最高である21名が、4月にはさらにそれを上回る29名（第35期生）が召された。日本の伝道をその双肩に担うこれら「つわものたち」の活躍に期待したい。

9日間の研修を  
終えて

みんなで共に涙し、笑い、学び合った充実した9日間。素晴らしい28人の仲間たちに感謝しています。多くの教師の方々と食事を作って下さった姉妹たち、同僚から多くの愛を感じる事ができました。清さ、従順さ、謙遜さ……ととてもたくさんを学びました。伝道に出て本当によかったと思います。ここで強い証を得ることができました。「かならずできる」そんな信仰をさらに大きくできたことに感謝しています。

また、おいしい麦の食べ方を学び、「麦の恐怖」に打ち勝つこともできました。（JMTCの交換日記より、第35期生石田智通長老）



▲第35期生29名、JMTC設立以来の最多人数



▲熱心にレッスンプランの勉強

## 信仰生活70年の実り

——教会歴最年長、  
長尾栄姉妹(89歳)



長尾栄姉妹は89歳。信仰生活70年。日本の伝道の黎明期に改宗して以来、夫の改宗と家族の結び固めを長い間待ち望んでいたが、ついに念願がかって今年の3月に東京神殿で永遠の結び固めを受けた。

去る3月19日、東京神殿において、東京ステーキ部第3ワード部の長尾栄姉妹は、夫の芳男兄弟と永遠の結び固めを受けた。共に89歳の高齢である。特に長尾姉妹は現在、日本の教会員の中では一番長い教会歴の持ち主である。1901年に日本での伝道が開始されてほどなくして、母親と教会に集うようになった。モルモン経を初めて日本語に翻訳したアルマ・O・テイラー長老の下で福音を学んだという。

「あの頃は日本語になっていたものは何

もなく、それでテイラー長老が苦勞してモルモン経を翻訳されたんですよ。宣教師も今みたいに日本語をアメリカで学んでくることができないので、本当に苦勞されていました。提灯ていとうを下げて街頭伝道をしたり、演説えんせつをしたりしていました」と、当時をなつかしく回想する。

長尾姉妹は、非教会員の兄弟と結婚し、旧満州に渡ったこともあって一時教会に集えないこともあったが、戦後、伝道が再開された時には、いちはやく教会に再び集うようになった。その後、活発に教会活動を続けたが、愛する夫と永遠に連れ添いたいとの想いは一時も彼女の胸を離れることがなかった。

そんな彼女の祈りが応えられる時がついにやってきた。夫の芳男兄弟は一昨年しんねんの11月にバプテスマを受け、翌年長老に聖任される。そして、ふたりそろって念願の神殿参入の日を迎えるのである。

当日、東京神殿において、古くからの友人である渡部正雄兄弟姉妹、柳田藤吉兄弟姉妹、佐藤龍猪兄弟ら多くの方々から祝福の言葉を受け、柳田兄弟の司式によって永遠の結び固めを受けた。証人として立ち会った渡部兄弟は、「これは本当に東京神殿がこの地に建てられたことによるひとつの祝福ですね」と喜びの言葉を添えていた。

「本当に長い間待って良かったと思います。主人と永遠に結ばれて、とても幸せです。何も思い残すことはありません。」そう語る長尾姉妹の目に光るものがあった。(レポーター：東京ステーキ部東京第3ワード部、武井進)



## 酒か契約破棄か

上野 道男

(仙台ステーキ部 泉ワード部)

今から10年ほど前、当時ソニーのテレビ事業部営業課長であった私は、北海道での販売量を増加させるという大きな課題を抱えていました。ある日、釧路のある大きな販売店への熱心な売り込みが成功して、相当量のテレビ購入の商談がまとまりました。早速その夜、その店の社長を招待し、一席設けることになりました。御多分にもれず宴席には酒はつきもので、その社長もなかなかの酒豪らしく、かなり酔っておりまして。

社長は、だれからか私がモルモンで酒を一滴も飲まないことも知らされていたらしく、私の方へ盃さかずきを差し出してこう言いました。「まさか、俺の出した盃を断わらないだろうな。そんなことをしたら、きょう結んだテレビ購入の契約は破棄するぞ」と脅かしました。その乱暴な態度に驚いたソニーの現地の係員が「あれほど言うのだから、ほんの一口だけでも飲んで下さいよ。神様だってこれぐらいのことは許してくれますよ」と、横からすすめてきました。私は、「一生涯酒は飲まないと神様と約束をしたので、どんなことがあっても破れません」と、きっぱり断りました。その席が気まずい雰囲気となり、結局、契約破棄という状況になるのもやむなしと、私は覚悟を決めました。

しかし、やがて興奮の静まった社長はこう言ったのです。「君は偉い！ 今後どんなことがあってもその信念を貫き通すのだ。今までどんなに酒の弱いやつでも、契約のことをちらつかすとヘターツとなって、酒を飲み、ぶっ倒れた者もいる。君は今の若い者としてはめずらしく骨

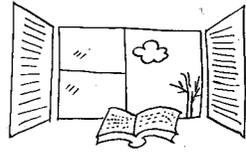
がある。気に入った。契約ももう少し上積みしてもよい」と。

私は本当に驚きました。そしてこの社長を通して、神様が私を励まして下さったことがわかり、心から感謝しました。

その後、ある事情から7年前にその会社をやめ、故郷の仙台の弟が経営する会社で、ソニーのカセットテープの製造、組立をしております。5年ほど前、コンピューターの間違いから、ある月の売り上げが実際より数百万円も多く計上されたことがありました。そこで直ちに、私はそれが間違いであることを納入先に伝えました。先方でもそれに気がついて、間もなくカセットテープ部門の取締役に呼ばれました。「今まで長い間、協力工場に仕事をしていただいて、売り上げが実際よりも少ないと、叱しかられたことはあっても、多いから修正してくれと言われたことはなかった。あなた方のような誠実な会社と取引できて大変光栄です」と、感謝の念を示してくれたのです。その後、好調な販売実績を維持し、2年で生産を倍増しております。

マタイ16:25に「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう」とありますが、私は、職場での様々な経験を通してそれが真理であることを、よく知りました。本当に神様は不思議なことをなさいます。一生懸命に神様の戒めを実践しようとする、必ず神様から助けられ、祝福を手にも余るほどいただけることを心から証します。(うえの・みちお 1936年生まれ。現在、仙台ステーキ部第二副ステーキ部長)

# 読者のひらば



## 「聖徒の道」の不思議な力

**私**は4年前にバプテスマを受けました。それから数週間後、日曜学校で予言者の言葉に従うというテーマのレッスンで、「聖徒の道」を予約するようにチャレンジされました。予言者の言葉がどういふものか知りたくて予約しました。その頃は、「聖徒の道」の持つ価値をよく理解していなかったので、大管長メッセージとローカルニュースだけ見て、本箱にしまいました。時には表紙だけ見て本箱に……という有り様でした。どちらかと言うと本を読むのが好きな方ではなかったのです。

1年程たち、通勤の20分間に本でも読もうかと思い、「聖徒の道」を読み始めました。そして「聖徒の道」の不思議な力を感じました。聖典と同じように胸が熱くなり、涙が流れ、何か自分をぐいぐい引き込んでいくような力を感じるのです。「聖徒の道」にも神様のみ言葉が書かれていることがわかりました。それからは、今までの1年分の「聖徒の道」を読みあさり、次の号が楽しみにになりました。また、教会の他の出版物も読みたくなりました。

「聖徒の道」を読んで、予言者、指導者に従うことの大切さを知りました。「聖徒の道」は神様のみもとへ行くための道路標識だと思えます。標識に従って行けば、必ず目標地へ安全に行けると信じています。(東京北ステーク部東京第2ワード部・配島美枝子・26歳)

## 大管長の生涯に学ぶ

**86**歳と言えば、ほとんどの人は現役を退いているのですが、キンボール大管長の生活ぶりを「聖徒の道」(4月号「予言者の生涯に学ぶ」)で読んだ時、本当に驚くと同時にまさに生ける神の予言者であるという気持ちを強くすることができました。病気や手術などの試練を何度も克服し、現代のヨブと言われる大管長が机の上に「実行」という標語を掲げ、全身全霊を込めて主の業に働いて下さっているのです。まさに神の業の模範を見る思いです。どんなに忙しくても、助けが必要な人を忘れない大管長、熱があってもそれに耐え、私たち一人一人に心を配りながら集会を管理して下さる大管長、「私にその山地を下さい」と言われた大管長。

大管長の年齢の3分の1程の私が、疲れたとか忙しいなどの理由で教会の責任や神権者としての義務を怠ったり、遅らせたりすることはとてもできないと強く思いました。

大管長が話された「私は死を恐れませんが、私が恐れることは救い主にお会いした時『もっとよくできたのに』と言われることです」という言葉をよくかみしめ、これからもっともっと教会員として忠実に責任を果たせるよう、全力を尽くして頑張りたいと思っています。(東京西ステーク部甲府ワード部・萩原彰・33歳)

★このページへのご投稿をお待ちしています。「聖徒の道」にまつわる出来事、ご感想をお寄せ下さい。イラストも大歓迎。年齢・電話番号も忘れずに記入して下さい。宛先：〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19/東京ディストリビューション・センター/「聖徒の道」編集室

## 一番の贈り物

**私**が教会員となって、あと数カ月で満1年になります。「聖徒の道」との初めての出会いは、教会員になりたての頃に、宣教師から1980年12月号をプレゼントされた時でした。最初のページを開いて見ると『一番の贈り物』というタイトルが目飛び込んできて、びっくりしたのを覚えています。まさに宣教師からの素晴らしい贈り物でした。

今年の1月号から「聖徒の道」を申し込み、今回で4冊目になります。毎月送られてくる「聖徒の道」がとても楽しみです。郵送された1冊目を手にした時には、とても感動しました。

「聖徒の道」を聖典やテキストと同様に、福音を学ぶために、またいろいろなことを知る情報誌として活用しています。その上、現在、支部の付属図書館の図書係として、過去のたくさんの「聖徒の道」を見る機会も与えられ、うれしく思います。今では「聖徒の道」をまだ読んでいない方々や、特に新しい教会員の兄弟姉妹へ推薦する立場になり、購読へ向けて奮闘中です。

この素晴らしい書物を、ひとりでも多くの兄弟姉妹が読むことができるようにと心からお祈りしています。(高崎ステーク部松本支部・湯沢裕行・27歳)

## すべてに勝るより良い業—伝道

**私**は岡山の地で改宗して4年になりますが、今まで伝道に対してあまり積極的な思いを持っていませんでした。しかし、「聖徒の道」4月号のウィリアム・R・ブラッドフォード長老のお話「伝道活動を通して清くなる」を読んで、改めて伝道の重要性を強く感じました。

私たちは、日頃、自分自身をととても大切なものと考えています。ところが、大事にする余り往々にして、「私は……の才能を持っています。これを伸ばさなければなりません。ですから伝道を行なう暇はありません」と考えがちです。しかし、よく考えてみれば、世の人々に福音を宣べ伝えることは、もっと大切であることに気がつきます。これがなければ今の私たちもないからです。

伝道は「自分の才能を伸ばす」という良いことをひとまず置いて、「他の人々に真理を述べ伝える」というより良いことのために時間を費やすことです。これは、とても大きな愛の表現だと思えます。そして愛の精神は、昇栄を目指す時に最も必要とされるものです。私は、伝道を通して愛を身につけていくことが、自分の昇栄にとって最も大切なことと思えます。(東京東ステーク部日立支部・木村敏則・27歳)

■題字/イラスト・新保京子(東京東ステーク部東京第5ワード部)



## 人生の荒野から

佐々木 優子

(東京南ステーキ部蒲田支部)

昭和40年2月24日、寒い冬の日でした。真っ暗な家の中では、幼い少女たちの瞳が、ふたりの大人の姿をじっと見つめていました。それは二度とこの世へは帰らぬ人となった両親と、6歳の姉と4歳になったばかりの私でした。

父は肝硬変のため、入退院を繰り返していました。母も体が弱く、私たちは生活保護を受け、神社の管理をする代わりに近所の人たちから、野菜や米をいただいて細々と暮らしていました。

療養が効あって家に戻っていた父は、23日の夜11時突然の発作と共に亡くなり、翌朝母もそのショックで帰らぬ人となりました。姉の泣き叫ぶ声で起こされた私は、母の胸にすがり、しきりに母の名を呼ぶ姉を見ても、何のこともやらさっぱりわかりませんでした。一緒に暮らしていた祖母もそれから1週間後に、心臓マヒで亡くなりました。

特別な親戚もない私たちでした。精神薄弱児だった姉は養護施設へ、私は、子供のない家に里子に入りました。それから6年、私が小学校4年の時、里母が亡くなりました。私と里父は隣町に移り、3カ月後、里父は小学校1年生の女の子を連れて方と再婚しました。しかし、私と彼らの折り合いが悪かったため、私が出ることになりました。小学校4年の12月のことでした。いたる所で鳴り響くジングルベルの

曲が私にはたいそう悲しく聞こえました。どこへ連れて行かれるのかわからない私は、せめて少しでも心の中を明るくしようと、街のネオンサインをじっと見つめていました。私を慰めているかのように優しく見えたネオンも、いつの間にか涙でにじみ、街の上にセロファンを張り合わせたように見えました。

私は、ミッション系の養護施設に入り、そこで初めてキリスト教、神様について知りました。日曜日には礼拝があり、讃美歌を歌い、聖書を朗読しました。大変厳しい生活で、私はよく年上の人からいじめられました。公立の学校に通っていましたが、施設にいることに引け目を感じ、自分に自信のない、消極的な私でした。

高校は、また里子に入り、その家の事業や家事をしながら通わせていただきました。教会に行きたいという気持ちがつり、古本屋で新約聖書を買いました。毎晩読んで涙しました。そんな私の姿を見てか、その従業員のクリスチャンの女性が、かつて彼女が使っていたという厚い本を私に下さいました。黒い布表紙には「聖書」とありました。私は涙で目がうるみ、言葉がのどにつまりました。

高校3年の春、用事を頼まれ五反田へ行きました。そして宣教師らしい方からパンフレットをいただきました。それにはこう書いてありました。「少し話を聞いて下さい。私たちはモルモ

ン教会の宣教師です。2年間、自費で伝道して  
います。」それを読んで私は強い感銘を受けまし  
た。2カ月ほどして教会に行きましたが、その  
日はそれで帰りました。それから1年後、蒲田  
の駅前で宣教師に会い、今度こそはと、レッ  
スンを受けました。そこには真理がありました。

私は、17年前のあの日から、バプテスマを受  
けたその日まで、私と家族を救ってくれる福音  
がもたらされることを、ずっと待ち望んでいた  
ような気がします。父と母は神殿において死者  
のための身代わりのバプテスマと夫婦の結び固  
めの儀式を受け、私との親子の結び固めも終え  
ました。霊界でこの日をずっと待っていた両親  
のことを思うと、胸がつまります。この大いな  
るみ業が、すべての人にゆきわたるならどん  
なに素晴らしいことでしょう。

これまで愛し、励まし続けて下さった兄弟姉  
妹や、福音を教えて下さった宣教師、そして多  
くの世の中の人に感謝しています。両親がいな  
くとも、何もなくとも、いつも天のお父様の愛  
があるから生きてこられた私です。何度も死ん  
でしまいたいと思いましたが、ここまで生きて  
これて本当に幸せです。たくさんの幸せを神様  
からいただいたので、私は伝道に出て、その何  
万分の一かを神様にお返ししたいと思います。

(ささき・ゆうこ 21歳、現在日本福岡伝道部  
宣教師)



### ♣おわび訂正

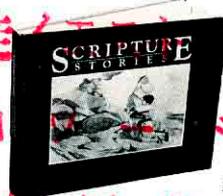
4月号の菊地良彦長老の話の中で以下の誤  
りがありましたので、おわびして訂正致します。

1. p.115 の左段13,16行目と右段15, 17, 24,  
34行目「長」→「崔」
2. p.115 の第5段落「皆さんは主の業のた  
めに全身傷だらけであるかもしれませんが。  
しかし、皆さんは次の山に登る備えがで  
きています。私たちは皆さんを愛してい  
ます。皆さんが必要です。」→「キンボ  
ール大管長、あなたは主の生ける予言者  
です。あなたは古えのヨブのように、主の  
業のため全身が傷だらけであるかもしれ  
ません。しかし、あなたは次の山に登る  
備えができています。私たちはあなたを  
愛しています。あなたが必要です。」
3. 5月号p.45の静岡ステーキ部の担当地区  
代表「鈴木正三長老」→「柏倉仁長老」

### ♣お知らせ

4月と10月にソルトレーク・シティーで開  
かれている総大会の特集号は、これまで半年  
遅れで出版していましたが、今年から3カ  
月遅れで出版できるようになりました。した  
がって、今年の4月の総大会報告は、7月号  
に掲載されます。

### ♣新刊紹介「聖典からの物語」



21×26.5cm

ハードカバー  
全272ページ

小学校高学年以上

1,600円

邦訳 6月上旬発売予定

末日聖徒

浦和

付属図書館

